





第6表 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器組成推移表1

時期区分		弥生時代後期後半(畿内第V様式後半)			古墳時代初頭(庄内式)
時代細分		古相	中相	新相	古相
土器様相		様相1(14)	様相2(14)	様相3(8)	様相4(8)
広口壺	A <sub>1</sub>				
	A <sub>2</sub>				
	A <sub>3</sub>				
	B <sub>1</sub>				
	B <sub>2</sub>				
	C				
	D <sub>1</sub>				
	D <sub>2</sub>				
広口長頸壺					
広口短頸壺					
広口直口壺					
無頸壺					
細頸直口壺					
長頸壺	A <sub>1</sub>				
	A <sub>2</sub>				
	A <sub>3</sub>				
二重口縁壺	A <sub>1</sub>				
	A <sub>2</sub>				
	B				
短頸直口壺	A				
	B				
台付壺	A				
	B <sub>1</sub>				
	B <sub>2</sub>				
甕	A-I				
	A-II				
	A-III				
	A-IV				
	B <sub>1</sub>				
	B <sub>2</sub>				
	C				
有稜高杯	A <sub>1</sub>				
	A <sub>2</sub>				
	B <sub>0</sub>				
	B <sub>1</sub>				
	B <sub>2</sub>				
	C <sub>1</sub>				
	C <sub>2</sub>				
	D <sub>1</sub>				
	D <sub>2</sub>				
	E <sub>1</sub>				
	E <sub>2</sub>				
F					
G					
H					

第7表 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器組成推移表2

時期区分	弥生時代後期後半(畿内第V様式後半)			古墳時代初頭(庄内式)
時代細分	古相	中相	新相	古相
土器様相	様相1(14)	様相2(14)	様相3(8)	様相4(8)
碗形高杯	A <sub>1</sub>			
	A <sub>2</sub>			
	B <sub>1</sub>			
	B <sub>2</sub>			
	C			
大形器台	A <sub>1</sub>			
	A <sub>2</sub>			
	A <sub>3</sub>			
	B			
	C			
小形器台	A			
	B			
裝飾器台				
小形鉢	A <sub>1</sub>			
	A <sub>2</sub>			
	B <sub>1</sub>			
	B <sub>2</sub>			
	C			
	D			
	E			
	F			
中形鉢	A			
	B			
	C			
大形鉢	A			
	B			
	C			
	D			
台付鉢	A			
	B			
有孔鉢	A			
	B			
手焙形土器	A			
	B			
蓋	A			
	B			

凡例

..... 1～4個      ———— 5～9個      ————— 10～19個      ————— 20個以上

・各様相の( )内の数字は資料数を示す。

・変Aについては本書報告久宝寺遺跡29次S W6001～S W6006以外は全容を知り得たものに限定。

## 6. 各様相のまとめと既往編年案との対比関係

各様相の概要と1987年以降に発表された中・南河内地域を対象とした弥生時代後期～古墳時代初頭における各編年案との対比関係を考えてみたい。

様相1は弥生時代後期前半からの系譜を引き漸移的に推移する器種形式が多い他、新たな器種として手焙形土器が出現している。

壺類では、広口壺類の器種が豊富である他、後期前半に出現をみた長頸壺類も量的に安定しており壺類の主要器種としてその一角を占めている。また、広口壺類ならびに長頸壺に絵文や記号文を施文するものが多く認められるのも本様相の特徴の一つである。甕類では、甕Aにおける分割成形手法が踏襲される他、底部形成では円板充填法のほか底部輪台法の増加が認められる。体部形態では体部中位に最大径を持ち、後の「北鳥池遺跡下層甕(甕A<sub>3</sub>)」の祖形的形式の萌芽が認められる。高杯類は有稜高杯A類の消滅から有稜高杯B<sub>2</sub>を系譜に持つ有稜高杯B<sub>1</sub>・C<sub>1</sub>が成立する他、椀形高杯ではA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>が主流を成す。鉢類には小形、中形、大形ならびに台付き鉢類、有孔鉢類の器種があり量的にも豊富である。器台は大形器台A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>の3型式ならびに搬入品の大形器台Cがあり、弥生後期を通じて最も大形器台類が豊富である。本様相に新たに出現する手焙形土器は、覆部と体部の境に突帯を設けるA型式のものが多く、その他の器種としては、蓋がある。

既往編年では、寺沢・森井編年のVI-1・VI-2様式、一瀬編年の第I段階、若林編年の様相3古相・新相、杉本編年の12・13期が本様相と対比される。なお、寺沢・森井編年のVI-1・VI-2様式に比定された資料中においては、本書で様相1の区分基準とした有稜高杯B<sub>1</sub>の単独ないしはB<sub>1</sub>・C<sub>1</sub>が共存していることから土器組成からは2小期の細別は難しいと考えられる。

様相2は前様相から漸移的に推移するが壺類の器種減少と壺類・高杯類を中心とした小形化傾向が進行している。新たに出現する器種としては、細頸直口壺、無文の二重口縁壺A<sub>1</sub>、口縁部外面に装飾を施した二重口縁壺B、庄内期に盛行する小形器台の祖形となる大形器台B、手焙形土器の覆部以下の形状を呈する鉢Gがある。

壺類のうち広口壺では前様相から継続するものの広口壺A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>・D<sub>2</sub>が本様相に消滅する。長頸壺は小形化傾向が顕著であり、中・小形を中心とする長頸壺A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>が主流となっている。前様相から継続する広口長頸壺・無頸壺が本様相で消滅する。細頸壺は後続様相に存続するものの、本様相に出現した細頸直口壺に形態変化している。本様相に出現する無文・有文の二重口縁壺は形態的な斉一性を欠くものの量的に確立されており、本様相の特徴付ける器種である。甕のうち甕Aについては、体部最大径が中位にある甕A<sub>3</sub>に分類形態のものが、器高数値で区別したI(小形)、II(中形)に波及しており、体部の球形化傾向が進行している。口縁部形態では、b<sub>2</sub>・b<sub>3</sub>以外の形態がある。高杯形土器のうち有稜高杯は前様相に比して小形化が進行しており、有稜高杯B<sub>2</sub>・C<sub>2</sub>と有稜高杯B<sub>3</sub>から系譜を引き更に小形化した有稜高杯D<sub>1</sub>の3型式が併存している。椀形高杯は前様相から継続する椀形高杯A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>のほか、椀形の杯部を持つB<sub>2</sub>や庄内様式に盛行する椀形高杯の遡源的な形態である椀形高杯Cが成立している。鉢形土器のうち小形品は前様相から継続する他、手焙形土器から派生した鉢Cが成立している。中形品は中形鉢A・Cが存続するが中形鉢Bは消滅している。大形品は前様相と同様A～Dの4型式が存続している。台付き鉢はA・Bが存続するが本様相で消長を遂げている。有孔鉢はA・Bが存続している。大形器台はA<sub>1</sub>・

A<sub>2</sub>の2型式が存続する他、大形器台Bの出現をみるが全体的に激減から消長に進行するもので、本様相前後に終焉を遂げた銅鐸を媒介とした祭祀形態の変化に符合した可能性がある。手焙形土器はAの存在とB型式への変化が認められる。蓋形土器はBがあるが本様相をもって器種が消長を逃げる。

前様相の様相1では、寺沢・森井編年との対比の中で有稜高杯の指数分布を機軸として編年案を構築した場合、河内VI-I・VI-II様式とされる資料から出土した有稜高杯からは両者間を峻別し細分することは困難と判断し様相1と河内VI-I・VI-II様式が対応するものと考えた。様相2は、寺沢薫氏による矢部遺跡編年（以下矢部編年）の庄内0式より古い様相を示すため直接対応するものは無く、寺沢・森井編年の河内VI-IIと庄内0式との中間に位置付けられよう。その他、一瀬編年の第II段階a、杉本編年では14期～17期に対応するものと考えられる。

様相3の特徴としては、後期前半に成立し壺類の主要器種の一角を占めた長頸壺A<sub>1</sub>型式と大形器台の消長をはじめ様相2に顕在化した壺・高杯形式を中心とした小形化への移行、更に広口壺D<sub>3</sub>の出現に代表されるように加飾された器種の増加は庄内様式成立前の布石的な状況を示唆している。

壺類のうち広口壺類では器種の減少が顕著で広口壺A<sub>1</sub>・A<sub>3</sub>・B<sub>1</sub>・Cと新たに出現した広口壺D<sub>3</sub>の5型式に減じている。細頸直口壺は量的な増加のほか前様相に比して体部形状の大形化が進行している。長頸壺類では小形のA<sub>3</sub>のみが存続する。二重口縁壺はA<sub>1</sub>・Bが存続し二重口縁壺A<sub>1</sub>については前様式に比して体部の球形化が進行する。短頸直口壺類も他の壺類と同様小形化が進行している。甕は甕Aでは体部球形化が進行したA<sub>3</sub>形態の増加と主要器種の小形化の趨勢に符合して器高が27cm以上のIVとした超大形品が消長を逃けている。体部成形では連続ラセン状タタキ範囲の拡大や底部形状では突出度が小さいものから突出しないものが量的増加を計っている。外面にハケメ調整を施す甕Bは微量存在し、一部内面にヘラミガキを施すものがあるが既して搬入品が多い。高杯形土器のうち有稜高杯では、小形化を達成した有稜高杯D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>型式が主流で量的にも安定している。椀形高杯は椀形高杯B<sub>2</sub>とCが存続するが、椀形の杯部に扁平で大きく開く脚柱部を持つ椀形高杯Cが主流となる。鉢形土器は小形品については、前様相から継続するものが多い他、新たに中部・東部瀬戸内地域からの搬入品である小形鉢Dの出現と前様相に出現をみた小形鉢Gの消長が特徴的である。また、体部外面調整においては、タタキ調整によるものが減少しナデ調整によるものが増加傾向にある。中形品・大形品の鉢形土器は器種の減少と量的低下が著しく、中形品では中形鉢A、大形品では大形鉢Dが存続している。有孔鉢はA、Bが存続する。手焙形土器は微量ながら存続するが底部高の低下や底部高台を欠く形態に変化を逃げている。

矢部編年の庄内0式、杉本編年の18期と19期に位置付けられた一部と併行関係が考えられる。一瀬編年では、第II段階bとされた内の久宝寺南（その2）のHトレンチSD70出土資料が対応するものと考えられる。

様相4は庄内様式を代表する庄内式甕の出現もさることながら、様相2以降に顕在化した各器種の小形化と体部球形化の帰着点としての丸底化に加飾・精製の要素が付加された土器群で構成される土器組成を中心としている。

壺類のうち、広口壺は器種の減少傾向が著しく広口壺A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>・C・D<sub>3</sub>が存続する。細頸直口

壺は器高に対して口径部高の占める比率が高くなり庄内Ⅱ以降に盛行する直口壺の粗相的な形態に変化している。長頸壺の系譜をもつ小形の長頸壺A<sub>2</sub>の一部は丸底化を果たしている。二重口縁壺は加飾・精製化を果たしたB型式が盛行しており庄内様式を代表する器種の一つである。甕形土器は甕A、B、Cがある。甕Aは前様相に比して球形化・丸底化の変化が顕著である他、口縁端部の形態ではa、dの2型式への斉一化が計られている。なお、本様相の甕Aについては概念的にはV様式系甕として峻別する必要がある。甕Bは吉備地方からの搬入品ないしはその影響下にある器種で河内型庄内甕の成立に影響を与えた器種の一つである。甕Cとした河内型庄内式甕の成立期のものは「く」の字に屈曲する口縁部で、体部は上位に最大径を持ち尖り底で体部外面はタタキ調整、内面はヘラケズリが屈曲部に及ぶものである。胎土からは在地産、生駒山西麓産があり多元的な発生が示唆されている。高杯形土器では有稜高杯D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>が減少し、有稜高杯E<sub>1</sub>・E<sub>2</sub>型式に変化を遂げている。また、二段に屈曲する杯部に加飾を施す有稜高杯Hや有稜高杯Gの出現は吉備地方との直接的な交流とその強い影響力が窺われる。碗形高杯は碗形高杯C型式に集約されており、以後布留式古相にかけて存続している。鉢形土器のうち小形品は前様相から継続する小形鉢A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>、C、Dの他、吉備地方からの搬入品である小形鉢E、Fが出現している。中形・大形品の鉢は少なく中形ではA、C、大形ではB・Dがある。有孔鉢では有孔鉢A、Bが存続するが量的には減少傾向が著しい。器台では、前様相に衰退した大形器台に代わって小形器台A・Bが出現している他、やや大形の装飾器台の出現がある。

矢部編年の庄内Ⅰ式、米田編年の庄内Ⅰ、原田編年の庄内Ⅰ期、若林編年の様相4古相、杉本編年の19期～22期に対応し、一瀬編年では第Ⅱ段階bの基準とされた久宝寺南（その2）のSD51が該当するが、この資料の土器組成は様相3・様相4が混在しておりその中の庄内様式が様相4と対比される。

第8表 既往編年案との対比

本編年2003	弥生時代後期後半（畿内第V様式後半）			古墳時代初頭（庄内式）
	古相	中相	新相	古相
	様相1	様相2	様相3	様相4
米田編年1981				庄内Ⅰ
矢部編年1986			庄内0式	庄内Ⅰ式
一瀬編年1988	第Ⅰ段階	第Ⅱ段階 a	第Ⅱ段階 b	
寺沢・森井編年1989	Ⅴ-1・Ⅴ-2様式			
原田編年1993				庄内Ⅰ期
若林編年1999	様相3古相	様相3新相		様相4古相
杉本編年2001	12・13期	14～17期	18期と19期の一部	19期～22期

## 7. 北鳥池遺跡下層資料の再評価

本稿においては、北鳥池遺跡下層出土資料（第7図1）に代表される有稜高杯を有稜高杯D<sub>2</sub>に分類し、指標資料を見出した遺跡名を冠して「北鳥池遺跡下層型有稜高杯」と呼称し、弥生後期型の有稜高杯の系譜を引く最終段階として位置付けている。

北鳥池遺跡下層式資料については、1974年、都出比呂志氏が「古墳出現前夜の集団関係—淀川水系を中心に—」の中で中・南河内地域の弥生後期末に位置付けられて以降、後出の庄内様式の出現時期との関わりの中で弥生土器から古式土器の変遷序列を考えるうえで多くの議論を提供してきた。

1980年、芋本隆裕氏は「北鳥池遺跡出土土器の再整理」の中で第V様式的な分割成形が確立していく過程をV様式後半～庄内式新相までをI～Ⅲの3段階に大別した。第I段階（上六万寺式）は、逆円錐台部の共通利用による相似形態土器の量産化、口縁部「叩き出し」成形やタタキ技法の発達に伴う胴部の連続成形範囲の拡大化。第II段階（第V様式～庄内式古相）は、連続成形範囲の拡大による肩部が半円形に張り出す器種の出現を経て半球形の胴上部に尖り底ぎみの逆円錐台が付き庄内式のプロポーションである体部2段成形の完成。第III段階（庄内式新相）は、逆円錐部の縮小退化と球形胴から丸底化への進展傾向をみる変遷が考えられている。また、北鳥池下層式出土土器の位置付けについては、「幾つかの前提を必要とした上で第5様式系土器の最終末として庄内式への技法的影響を認めることができるか、あるいは短期間にタタキ技法と逆円錐台部の形状、平底と尖底、内面へら削り等の諸要素が絡み合ったなかで内面を削る甕と共存する一つのグループであるのかについて議論する余地がある資料」とされ、慎重ながらも北鳥池遺跡下層出土土器が庄内式に含まれる可能性を示唆された。

それ以降、北鳥池遺跡下層式の位置付けについては、活発な論考が多く発表されている。

北鳥池遺跡下層式を庄内式に含める考えとしては、1985年の置田雅昭氏・森岡秀人のほか1986年、嶋村友子氏は「河内における庄内式の甕形土器」の中で、庄内式甕が上六万寺式の直後に吉備地方の影響を受けて成立したものとし、北鳥池遺跡下層式の甕は庄内式甕の製作技法の影響によるものとされた。1986年、寺沢薫氏は矢部遺跡報告で弥生時代末から古墳時代初頭の過渡期的な性格を「0」というイメージにおきかえて様式を設定する中で、氏が六条山遺跡報告で細分された第V様式の様式6は庄内式の範疇に含め庄内0式期に帰属するものとされた結果、北鳥池遺跡下層式は庄内期の資料として位置付けられた。1987年、一瀬和夫氏は「久宝寺・加美遺跡出土の古式土器」の中で、高杯杯部の指数変化から弥生時代後期新段階～古墳時代前期（布留式中段階）までを4期（第I段階～第IV段階）9細分したなかで、北鳥池遺跡下層式の高杯は庄内期古段階に比定される第II段階bにあたるものとされた。1988年、米田敏幸氏は「中河内の伝統的の第V様式とその意義」の中で北鳥池下層式の持つ諸属性は第V様式終末の土器の特徴を示しているものでなく、庄内式甕の出現によってこれに対抗するかたちで上六万寺式の甕から発展した伝統的の第V様式甕のひとつの形態を示すものと考えられた。

一方、北鳥池遺跡下層式を弥生時代末期とする都出氏の考えを支持するものとして1976年、関川尚功氏は「纏向」の報告で、纏向Ⅰ式（大和地方のV様式最終期）併行期の河内地方の資料として北鳥池遺跡下層式をあげられている。

1982年、合田茂伸氏は「北鳥池下層式併行土器群の問題点」の中で北鳥池遺跡下層式土器を庄

内式成立より前の第V様式土器として捉えることが妥当であるとしたうえで、北鳥池遺跡下層式出土の球胴形甕の分布が河内平野、大和盆地、淀川流域、和泉平野等に広がりを持つことを明らかにした。また、1993年、筆者は「東弓削遺跡第4次調査」の報告で、河内型庄内式甕の最古形態は体部三分割のタタキ成形で体部最大径が体部の上位にあるものとし、北鳥池遺跡下層式出土甕にみられる球胴形の体部はむしろ後出形態に共通点が認められるものと考え、北鳥池遺跡下層式から河内型庄内式甕が直接的に系譜上にのるものでないことを示した。また、土器組成においても北鳥池遺跡下層式と庄内式古相では、高杯、鉢の型式の違いや小形器台の出現や装飾を多様化した器種の出現、精製化への移行といった面で峻別は可能と考え、北鳥池遺跡下層式は弥生後期末に含めて考えたことがある。

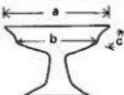
北鳥池遺跡下層式を庄内式に含める考え方は、河内型庄内式甕の成立期に共通して見られる体部上位に最大径を持つ形態的な特徴を等閑視して、北鳥池遺跡下層式に見られる庄内様式の萌芽やV様式甕にみられる連続ラセン状タタキによる球胴化の深化形態の延長上に河内型庄内式甕が出現したとする考え方を盲信した結果に他ならないと考えられる。北鳥池遺跡下層式の甕形態は、様相2に出現した体部の球形化を指向したA<sub>3</sub>形態の型式変化の中で捉えられるもので、庄内様式成立期である様相4に球形化を完成させる甕AのA<sub>3</sub>形態より一段階古い型式のものと言えよう。

今回、有稜高杯の指数変化から有稜高杯D<sub>2</sub>と分類した北鳥池遺跡下層式に代表される「北鳥池遺跡下層型有稜高杯」は有稜高杯D<sub>1</sub>と共存することが多く認められた。中・南河内地域において報告された資料では、有稜高杯D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>が共存した段階で庄内式甕との供伴が認められたものは皆無であり、河内型庄内式甕は有稜高杯E類の出現以降に成立することが明らかとなった。以上のことから、弥生土器か土師器かの帰属にあたって論争の俎上にあった北鳥池遺跡下層式資料は、弥生時代後期末に位置付けるのが妥当と考えられる。

なお、河内型庄内式甕の成立にあたっては、V様式甕(甕A)の製作技法の成熟と球胴化を指向したA<sub>3</sub>形態の増加にみられる内在的要因と、様相3以降顕在化する中部・東部瀬戸内地域からの搬入土器の増加に触発されて成立した内面のヘラケズリ技法導入による薄手化等の外在的要因が融合して、有稜高杯E類が出現する様相4段階に成立したものと考えるのが現時点は妥当と考えられる。

#### 註記

- 註1 小林行雄 1958「大阪府平岡市額田町西ノ辻遺跡I地点の土器」「大阪府平岡市額田町西ノ辻遺跡E・F・D・H地点の土器」『弥生式土器集成資料編I』
- 註2 坪井清足 1962「穂積式土器」『日本考古学辞典』
- 註3 佐原 真 1968「近畿地方」『弥生式土器集成』本編2
- 註4 都出比呂志 1974「古墳出現前後の集団関係—淀川水系を中心に—」『考古学研究第20巻4号』考古学研究会
- 註5 森岡秀人 1977「畿内第V様式の福年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」『大師山』関西大学
- 註6 寺沢 薫他 1980「六条山遺跡」奈良県文化財調査報告書第34集 奈良県立橿原考古学研究所
- 註7 寺沢 薫 1986「近畿古式土師器の福年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県文化財調査報告書第49集 奈良県立橿原考古学研究所

- 註8 広瀬和雄他 1986『亀井（その2）』大阪府教育委員会（財）大阪文化財センター
- 註9 一瀬和夫 1988「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『八尾市文化財紀要3』八尾市教育委員会文化財室  
一瀬和夫 1989「9. 久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『大阪文化財論集—財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集』（財）大阪文化財センター
- 註10 寺沢 薫・森井貞雄 1989「1 河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- 註11 若林邦彦 1999「第Ⅷ章 第2節 河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期土器の変遷」『河内平野遺跡群の動態Ⅷ』大阪府教育委員会（財）大阪府文化財調査研究センター
- 註12 杉本厚典 2001「河内における弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけての土器の型式編年と様式」『研究紀要 第4号』大阪市文化財協会
- 註13 前掲註9
- 註14 西村 歩 1996「第6章 和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集（財）大阪府文化財調査研究センター  
和泉地域の弥生時代後期後半～古墳時代前期に比定される有稜高杯Aの口線比・口線比の指数変化の違いから有稜高杯をA1～A9の9型式に細分したうえで、型式ごとに1小期を設け、他器種との組成関係を明らかにした編年試案が示されている。中・南河内地域においては、和泉地域のような1型式＝1小期的な変遷は見られず3型式前後の有稜高杯が共存しつつ推移することが明らかとなった。
- 註15 前田敬彦 1990「皿形高杯の分析」『山口遺跡第5次発掘調査報告書』和歌山市教育委員会
- 註16  $\cdot$ 口線比  $b \div a \times 100$   
 $\cdot$ 口線比  $c \div a \times 100$
- 
- 註17 宇本隆裕他 1979『鬼塚遺跡Ⅱ. 若江遺跡』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19 東大阪市遺跡保護調査会
- 註18 1970「河内古代遺跡の研究」大阪府花園高校地歴部  
宇本隆裕 1980「北島池遺跡出土土器の再整理」『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』東大阪市遺跡保護調査会
- 註19 中西靖人・國乗和夫 1976『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書 大阪文化財センター調査報告XX』（財）大阪文化財センター
- 註20 高萩千秋他 1987「成法寺遺跡—八尾市光南町1丁目29番地の調査—」（財）八尾市文化財調査研究会
- 註21 高萩千秋 1987「小阪合遺跡—八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査—」（財）八尾市文化財調査研究会報告11（財）八尾市文化財調査研究会
- 註22 吉田野乃 1992「8. 中田遺跡（91-293）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財報告26 八尾市教育委員会
- 註23 堀江門也他 1980『瓜生堂』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター  
本資料については、筆者が註70における「第5章まとめ 3）中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」で庄内式壺が存在しないことから庄内式期以前に位置付けたことがある。今回、有稜高杯E類と庄内式壺が共存することが明らかになったため、本資料を庄内式に含めて考えることとした。
- 註24 福永信雄 1975「上六万寺遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会
- 註25 村川行弘・瀬川芳則他 1980「河内大竹遺跡—八尾市水道局低区第3配水池送配水管布設用地内埋蔵

- 文化財調査報告書― 八尾市教育委員会・大阪経済法科大学考古学研究会内大竹遺跡発掘調査団
- 註26 田代克己他 1980『恩智遺跡 一級河川恩智川改修工事に伴う恩智遺跡発掘調査報告書』瓜生堂遺跡調査会
- 註27 原田昌則・成海佳子 1983「第3章太田川遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和56・57年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告3（財）八尾市文化財調査研究会
- 註28 高島 徹他 1983『亀井』（財）大阪文化財センター
- 註29 若林邦彦他 1999『河内平野遺跡群の動態Ⅴ―南遺跡群 弥生時代後期～古墳時代前期―』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター
- 註30 前掲註29
- 註31 広瀬雅信他 1992『萱振遺跡』大阪府文化財調査報告書第39輯 大阪府教育委員会
- 註32 芋本隆裕 1975「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会
- 註33 芋本隆裕他 1979「鬼塚遺跡Ⅱ. 若江遺跡」東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19 東大阪市遺跡保護調査会
- 註34 前掲註24
- 註35 東大阪市教育委員会 1975『馬場川遺跡Ⅲ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報14
- 註36 坪田真一 1997「Ⅰ久宝寺遺跡（第8次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告55』（財）八尾市文化財調査研究会
- 註37 小林義孝・西川寿勝他 1992『久宝寺遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 註38 赤木規規・一瀬和夫他 1987『久宝寺南（その2）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』（財）大阪文化財センター
- 註39 前掲註20
- 註40 清 斎 2001「6. 郡川遺跡（1999-627）の調査」『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告44 八尾市教育委員会
- 註41 清 斎 1992「5. 弓削遺跡（90-553）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告25 八尾市教育委員会
- 註42 清 斎 1996「17. 弓削遺跡（93-631）の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告33 八尾市教育委員会
- 註43 前掲註29
- 註44 前掲註29
- 註45 前掲註29
- 註46 近江俊秀・岡田清一他 1989「亀井遺跡―南亀井町4丁目41-1の調査―」（財）八尾市文化財調査研究会報告19（財）八尾市文化財調査研究会
- 註47 上林史郎 1989「農免農道・河南中地区建設に伴う神山遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
- 註48 前掲註18
- 註49 前掲註19
- 註50 前掲註22
- 註51 前掲註20
- 註52 前掲註21

- 註53 中西靖人・宮崎泰史 1984『亀井遺跡Ⅱ』（財）大阪文化財センター
- 註54 藤井淳弘 1998「付編、跡部遺跡（96-580）の調査（その2）」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財報告38 八尾市教育委員会
- 註55 前掲註38
- 註56 福永信雄他 1977『馬場川遺跡発掘調査報告』東大阪市遺跡保護調査会
- 註57 前掲註23
- 註58 渡辺昌弘他 1984『美園』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- 註59 高萩千秋他 1983「第8章東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980-1981年度』（財）八尾市文化財調査研究会
- 註60 嶋村友子 1986『八尾市内遺跡 昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告12 八尾市教育委員会
- 註61 高木真光 1981『昭和53-54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会
- 註62 前掲註20
- 註63 宮野淳一・山田隆一他 1991『八尾市若林町所在 八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ—大正川流域調節池築造に伴う—』大阪府教育委員会
- 註64 前掲註10
- 註65 前掲註9
- 註66 前掲註11
- 註67 前掲註12
- 註68 前掲註7
- 註69 米田敏幸 1981「庄内式土器の細分試案」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会  
米田敏幸 1994「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究Ⅳ』庄内式土器研究会
- 註70 原田昌則 1993「第5章まとめ 3）中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『Ⅱ久宝寺遺跡（第1次調査）』（財）八尾市文化財調査研究会報告37（財）八尾市文化財調査研究会
- 註71 前掲註4
- 註72 前掲註18
- 註73 笹田雅昭 1985「弥生土器から土師器へ」『考古学ジャーナル252』ニュー・サイエンス社
- 註74 森岡秀人 1985「土器の交流—西日本—」『考古学ジャーナル252』ニュー・サイエンス社
- 註75 嶋村友子 1981「河内における庄内式の変形土器」『古代第82号』
- 註76 前掲註7
- 註77 前掲註9
- 註78 米田敏幸 1988「中河内の伝統的V様式とその意義」『考古学論集 第四集』考古学を学ぶ会
- 註79 関川尚功 1976「縦向1～3式土器に関する二、三の問題」『縦向遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 註80 合田茂伸 1987「北島池下層式併行土器群の問題点」『関西大学考古学研究紀要5』
- 註81 原田昌則 1993「Ⅰ東引削遺跡（第4次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告37』（財）八尾市文化財調査研究会

参考文献

- 参1 木原克司他 1976『長原遺跡発掘調査（資料編）』長原遺跡調査会

## 第2節 河内の弥生時代後期土器に現れる2・3の現象

—溝へ廃棄された土器が語るもの—

### 1. はじめに

発掘調査を行っているとき、多量の土器が廃棄されていることがしばしば見うけられる。無論、日常生活雑器の廃棄は有史を通じて行われており、高度資本主義社会の現代に生きる我々はそれをメガレベルで排出し、大きな問題となっている。近年になってようやく、可燃物と不燃物を分類し、さらに不燃物のなかでもリサイクルのできるものと不可能なものを区別して、それぞれに異なった処理をするという方法を導入している。そこでは処理のスピードと環境への配慮が問題であり、これ以外には、他に意義付けも必要なく、システムティックに、速やかに事が成されている。

しかし、環境への配慮やリサイクルという観点からみれば、弥生時代の人々はすでにこうしたことを取り入れていたのではないだろうか。可燃物である木製品は燃やして暖をとったり、煮炊きに利用し、二酸化炭素を残して消滅する。不燃物である土器や石器等は埋め立て処分地の代わりに谷筋や土坑、溝に捨ててしまう。決定的に違うのは2千年後にそれが掘り出された時、弥生人が文字資料を持たなかったために、様々な意義付けがなされる事である。当然、今回もその例に漏れない。

弥生時代後期になると、溝や河川あるいは土坑から土器の多量出土が顕著になる。かつて森岡秀人氏はV様式の土器が多量に出土することから弥生時代後期の時間幅が長くなる可能性を示す材料となるのではないかと考えた。(註1)しかし、比較する時期が一連の社会のなかで、同じ形態と製作技法をもった土器を廃棄しているならこうした仮定も受け入れられるが、弥生時代中期と後期という大きな変革期をはさんでいては、物量が時間幅を決定するとは言いがたいのではないだろうか。そこで、あらためて弥生時代後期における土器の大量廃棄をとりあげ、廃棄の背景と当該期にみられる土器形態の変化について考えてみたい。

### 2. 土器の大量廃棄について

弥生時代後期から庄内式初期頭にかけて、溝などへ土器を大量投棄している状況が往々として確認される。投棄の対象となる器種は壺・甕・高杯・鉢など日常に使用している土器のすべてが揃っており、手焙形土器が極少量含まれる。特徴としては破損していない完形品が多くを占めることである。穿孔や朱彩を施した土器は少量含まれるが、大半はそうした行為は行っていない。今回の調査では29-4調査区のS D6005にそうした傾向がうかがえる。南北にのびる溝の両岸に約195個体の土器がかたまっており、意図的に廃棄されたものと推定される。このような溝あるいは土坑への土器の廃棄は当該期に多くの事例をひろうことができる。

#### A. 弓削遺跡 溝(註2)

北西-南にのびる溝で、検出長約6.3m、幅4.4m、深さ0.8m以上である。埋土は大きく2層にわけられ、滞水あるいはゆるやかな流水状態であったとみられる。溝から約2mの地点で井戸が検出されており、集落に近接した溝であったと考えられる。凶化された遺物は83点で、甕34%、壺30%、高杯19%、鉢13%、器台4%で、朱の付いた壺や穿孔された壺、甕、有孔鉢がある。ま

た、甕口縁から炭化米が溢れた状態で見つかっている。弥生時代後期前半。

B. 弓削遺跡 第1次調査第3調査面 溝(註3)

南北方向の溝で、調査区外にのびる。検出長約20m、幅3.5~4m、深さ1.2~1.5mで、堆積層は大きく3層に分けられる。遺物は中層から密集した状態でコンテナ約150箱相当が出土している。時期は弥生時代後期前半。

C. 段上遺跡 溝100(註4)

溝の検出長は、2つに分割されている調査区を併せて40.8mを検出しており、未調査部分を含めて46.8m以上とみられる。幅は1.4~2.1mで、深さ0.15~0.3mを測る。土器は溝の中位に集中しており、次いで下位が多い。完形・破片を合わせて2292点の土器が出土しており、うち9点が非生駒西麓産である。穿孔した長頸壺、甕が含まれる。周辺で多くのピットと土坑が見つかっているが、明確に同時期と判断できる遺構は見つかっていない。弥生時代後期前半。

D. 恩智遺跡 SD13上部土器列群(註5)

東北-西南の溝で、検出長約3mで、幅2.8m、深さ1mである。この溝の南側肩部に沿って土器が列状に連なっていた。遺物はコンテナに約60箱あり、完形あるいは完形に近いものを合わせて約160個体あった。構成比率は甕47%、壺23%、高杯15%、鉢12%、器台1%で、手焙形土器が1点出土している。調査では35条の溝が見つかっているが、弥生時代後期に属するのは、この溝だけである。同時期の遺構は後述するSP03以外目立ったものはない。弥生時代後期後半。

E. 恩智遺跡 SP03(註6)

長径1.4m、深さ0.35mの土坑で、周囲1.8m四方の範囲で30cm大の礫が高さ20cm程度置かれている。遺物の出土状況は土器と礫が混在しており、投棄が繰り返して行われたと推定されている。遺物はコンテナ約53箱にのぼるが、完形になるものは少ない。また12点の焼成後穿孔の土器があり、他に朱を塗布したものも存在することから、祭祀に関連した土坑と考えられている。弥生時代後期。

F. 久宝寺遺跡 SD6005(本報告)

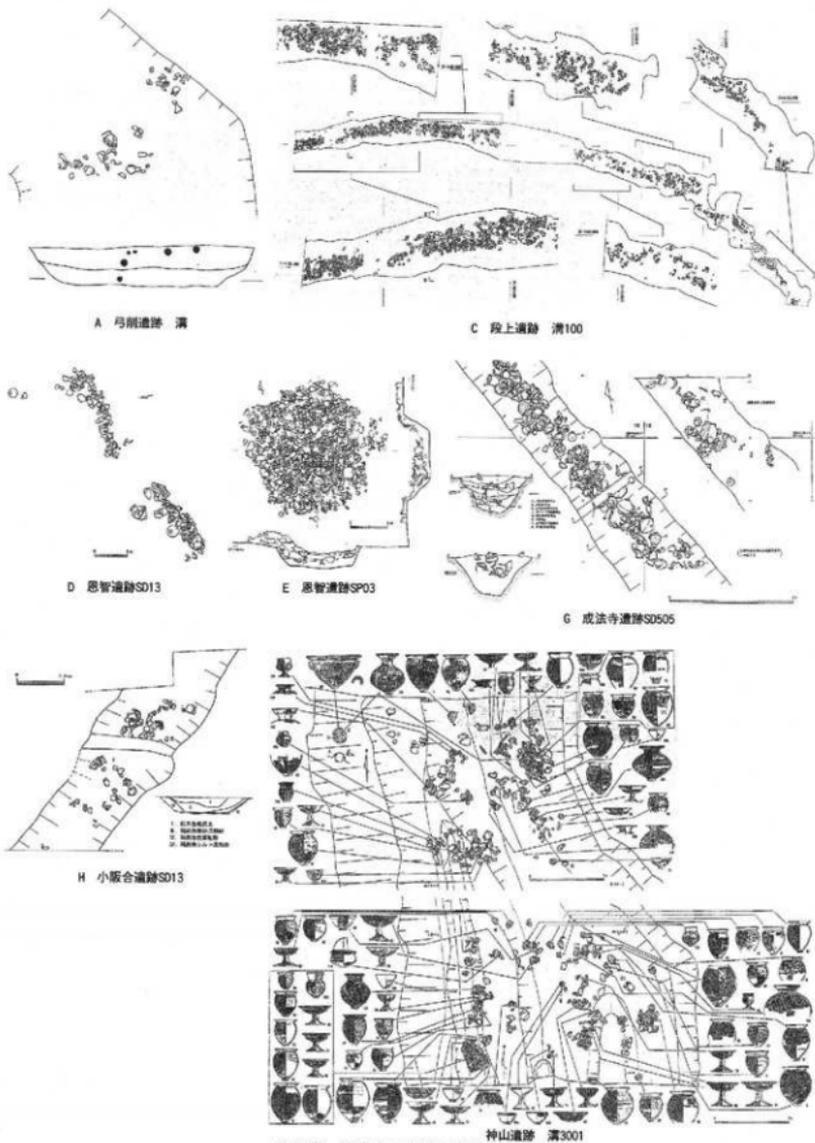
北西-南東に伸びる溝で、検出長19.5m、幅2.3~3.2m、深さ1.0mを測る。シルトと粗粒砂の互層堆積である。この溝の両岸で6か所の土器集積(SW6001~6)が確認された。一括性の高い土器群で、完形土器を多く含み195点を図化している。内訳は壺18%、甕54%、高杯13%、鉢13%、器台1%、手焙1%である。穿孔や朱を塗布したものは少ない。付近に同時期の遺構や明瞭な包含層はなく、居住域から離れた場所に位置しているとみられている。時期は弥生時代後期後半。

G. 成法寺遺跡 SD505(註7)

北西-南西の溝で調査区外にのびるが、長さ約4mを検出している。幅95~103cm、深さ約70cmで、70~80個体の土器が出土している。土器は最下層からは出土しておらず、溝が一定期間機能していた後に投棄されたようである。遺物は甕が殆ど占め、壺・鉢・高杯の順で、手焙形土器が1点含まれている。両岸では希薄ではあるが土坑やピットなどが見つかっている。しかし、遺物はほとんど出土せず、溝と遺構との関連は明確ではない。時期は弥生時代末期。

H. 小阪合遺跡(95-104) SD13(註8)

上記の成法寺SD505から東へ140mの地点で見つかっている。北北東-南南西の溝で、検出長



第1図 遺構内の土器多量廃棄の事例

4.1m、幅1.5m、深さ0.25mである。図化している遺物は18点で、そのうち甕が14点、壺が4点、他に鉢片が極少量出土している。穿孔や朱彩は行われていない。時期は弥生時代後期後半。

#### 1. 神山遺跡 溝3001 (註9)

南北にのびる溝で、検出長は10mであるが、他の調査区との関係から規模は130m以上と推定されている。一部上層の遺構に削平されているが、上幅5.5~8m、下幅3~6m、深さ1.2mである。埋土は大きく上層と下層にわけられ、流水と滞水を繰り返していた状況を示している。遺物は一括投棄された状態で出土しており、完形あるいは完形に近い土器が約170点以上出土している。甕70点、高杯35点、壺36点、鉢30点、手焙形土器3点で、甕が全体の4割を占めている。甕や高杯と比較すると壺は破片だけのものが多い。また、穿孔や朱彩は行われていない。溝周辺に住居跡は見つかっていないが、段丘斜面から流れ落ちる水を防ぎ、集落内部を貫く取・排水溝と考えられている。時期は弥生時代後期末。

これらの遺構の特徴をまとめると、土器の廃棄が短時間に行われていること、すなわち一括性が高いということ、そして完形土器が高い割合を占めること等が遺物についてはあげることができる。遺構については、溝周辺に同時期の遺構の存在が希薄なこと、独立性を第一にあげることができる。さらに埋没後に近接した時期の遺構が継続して形成されていないこと、つまり断絶性ということである。

溝・土坑へ廃棄された土器

- ①土器の一括性 (短時間の廃棄・完形比率の高さ)
- ②遺構の独立性 (同時期の遺構が傍で検出できない)
- ③遺構の断絶性 (後続する遺構が構築されない)

廃棄された土器の特徴

#### 3. 出土遺物と祭祀との関係

このような溝出土遺物については田代克己氏の一連の言及がある。(註10)田代氏は、瓜生堂遺跡と恩智遺跡の弥生時代中期の土坑や溝から多量の土器が出土することから、葬送儀礼に使用した穢れた土器を集落内に持ち込むことを忌避し、集落縁辺の土坑や溝に廃棄したものと考えた。

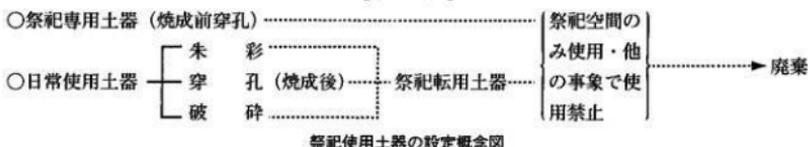
しかし、溝に廃棄された土器すべてが、葬送儀礼と関連付けられるであろうか。墓塚や周溝から出土する土器は明らかに葬送儀礼に関係したものと見える。しかし、墓域から離れている溝や土坑に廃棄された土器すべてが、葬送儀礼に伴うものと規定できるとは思われない。穢れの觀念により土器のもつ機能の転換が行われるなら、穢れたものをわざわざ墳墓から居住域の近くに持ち帰りはしないだろう。

銅鐸や動物形・器財形木製品など様々な祭祀に係わる遺物は、祭祀が葬送だけではないことを物語っている。穀物の豊穰、天候や河川などの自然、人の誕生、戦の勝利、また墳墓だけではなく居住域での忌避など、人の能力や個だけから得られる成果を越えたもの、言い換えれば「超越者・神」への畏怖と祈りが祭祀の対象となりうる。こうした祭祀は、集落の中心や生産域の傍らで、あるいは個人の住居のそばで行われただろう。超越者・神への祈りは取引、あるいは契約であり、「交換財」なくしては祭祀は成立しない。穀物や木の実、獣や魚の肉、飲料水などが土器に盛られ、供物として並べられたと推定される。そして、葬送儀礼や豊穰を祈る祭祀など、様々な祭祀に使用された土器は、供物の一部となり、現象・機能の転換が図られて溝や土坑などに廃

棄されたものと考えられる。

祭祀に使用された土器かどうかの判断は、一般的に次の3点の現象を施したもので判断することができる。第1に朱の塗布。第2に穿孔であり、これには口縁部や底部等の「打ち欠き」を含めることができる。第3に土器そのものの形態を変換する破砕である。また、これらは1つの現象だけではなく、第1と第2あるいは第2と第3など、複合させている場合も見受けられる。この現象のうち穿孔を焼成前に行われたものがあり、祭祀専用土器と考えられる。祭祀専用土器以外に日常生活用土器がもつ機能の転換がはかられた壺、甕、鉢などを、ここでは祭祀転用土器と呼んでおく。

### 【祭 祀】



だが、溝出土遺物にはこうした現象を伴わない土器が圧倒的多数を占める。それらは朱の塗布や穿孔をしておらず、祭祀転用土器とは異なる土器群で、破損によって廃棄されたとみられる土器とまったく破損していない完形の土器から成っている。つまり、溝に廃棄された土器は祭祀とは無関係なものが存在し、祭祀転用土器が大きく比重を占めるものではないことがわかる。

#### 4. 土器廃棄の背景

土器が多量に出土するのは溝が顕著である。溝の全長が確認された例はなく、神山遺跡S D 3001は推定であるが130m以上とされているのが最長で、段上遺跡一溝100が46.8mとこれに次ぐ。幅は、最も狭い成法寺S D 505の1m前後から神山遺跡S D 3001の5～8mまでである。また深さは、小阪合遺跡S D 13の0.25mが最小で、弓削遺跡一溝の1.2～1.5mが最大である。このように溝の規模には一定の規律はなく、居住定員数の多少や溝の性格などに起因するものであろう。また削平など後世の影響も考えられる。

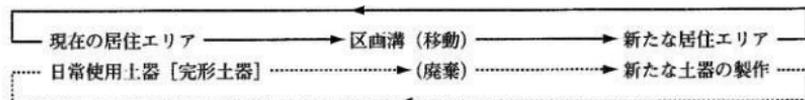
しかし、これら土器が廃棄された溝には「独立性」という共通項が認められることは前述したところである。久宝寺遺跡S D 6005の近辺では同時期の遺構はおろか包含層さえ見つかっていないが、南へ約200mの地点で、遺構が検出されている。成法寺遺跡や段上遺跡、小阪合遺跡でも同様の状況が確認されている。また、神山遺跡S D 3001でも同時期の住居跡は検出されておらず、調査担当者は後世に削平されたものと推定している。例外は弓削遺跡一溝で、そばで井戸が見つまっている。このような状況を呈しているため、溝と居住域の関係がもうひとつ掴みきれず、土器を廃棄した人々の姿が見えてこない。そのため溝本来の性格が明確にはなっていない。しかし、この溝のもつ独立性という特徴から性格を考えることが可能である。人の姿がないということは居住域から離れた場所、すなわち居住エリアの縁辺に溝が位置していたとみられ、居住エリアと他エリアを区画する溝と考えることができる。この場合の居住エリアとは住居域のみであるのか、あるいは墓域を含めたものであるかは現状では断言できない。そこで、ここでは生活圏と捉えて

おきたい。

溝は区画するラインとして意識されていたことは当然ではあるが、そのためだけに長大で、数mの幅を有する溝を掘削しないであろう。そこには生活圏における取・排水や他者の侵入を防ぐ機能が付加されていたものと考えられる。このような溝は集落が存続していくうえで必要不可欠なものであり、生活圏内で使用していくためには大量の土器廃棄を行うことができない。廃棄が行われるときは、溝自身が使用されなくなった時と考えてよいだろう。

さらに、神山遺跡や久宝寺遺跡、弓削遺跡の土器投棄状況は短期間（一括性）で投棄したと考えられていることは、これら土器群の意味をとらえるうえで重要な示唆を与えてくれるものである。すなわち祭祀転用土器でもない完形土器を突然廃棄しなければならない状況が起こったことが想定されるのである。

集落における重要な機能をつかさどる溝に、大量の土器を一括あるいは短期間に廃棄しなければならない状況はどのような時に発生するかを想定したとき、集落の移動ということが考えられる。集落の移動については、田井中遺跡と弓削遺跡の集落を取り上げて概観したことがある。（註11）田井中と弓削遺跡の間に点々と残る弥生時代後期の遺構出土土器の時期が異なっていることから同一集団が、環濠集落崩壊後に集落の移動を繰り返していたものと推定した。この推定が妥当性をもつものであるのなら集落の移動に際して、その地点で使っていた土器を廃棄していたのではないかと考えられるのである。現在の引越しても最も手間がかかるのが家財道具の運搬であり、荷車がないこの時代はなおさらである。このような観点から重量物である土器は貯蔵物の持ち運びなど必要最小限を除いて廃棄したものと推定できる。



弥生時代後期における集落移動と土器製作のサイクル概念図

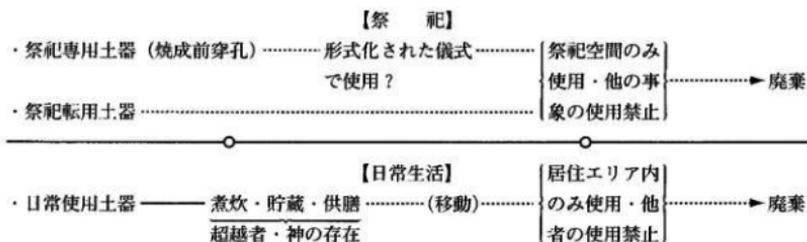
## 5. 溝や土坑への廃棄の意味

久宝寺遺跡 S D6005や小阪合遺跡 S D315、神山遺跡 S D3001では祭祀転用土器は含まれていない。また、成法寺遺跡 S D505や弓削遺跡一溝などで朱の塗布や穿孔した祭祀転用遺物は決して多くはない。しかし、それにもかかわらず完形土器の出土比率は高いことは第2節において述べた。神山遺跡 S D3001では、完形あるいはそれに近く、一割と認識できる土器は358点中174点と約49%であり、非常に高い比率をほこる。また、久宝寺遺跡 S D6005でも、やはり完形土器あるいは一個体と認識できる土器は61%を占める。前節でみてきたように、集落の移動に伴って廃棄されたとしても多量の完形土器を溝へ廃棄する意義はどこにあるのだろうか。

本来は現状で置き捨てるのが最も簡単な廃棄方法といえようが、堅穴住居内やその周辺に大量の土器が放置されている状況は比較的少ない。焼失住居など突然の失火の場合には住居内に土器は残されることもあるが、こうした場合以外は土器が遺存している例はあまりない。むしろ土器の廃棄が、居住域移動に伴う通常の行為であったことを溝あるいは土坑から見つかった多量の土器は示唆している。もちろん、日常使用中に破損した土器の廃棄も同様に行われていたことは、

接合不能の土器の存在からうかがえる。

溝へ土器を廃棄する行為は、祭祀で使用した土器を廃棄する状況と似ている。祭祀という事象で使用された土器は、葬送儀礼や神との交歓による忌避によって、他の事象で再使用できないように仮器化あるいは廃棄し、供獻土器として、また祭祀転用土器として忌避されたことはこれまで述べてきた。そこで重要なことは、土器の1)再使用を禁止すること、2)一定のエリアから持ち出させないことの2点である。それは朱彩や穿孔によって区別し、機能を損なう処置を施すことで再使用を拒み、また廃棄処分によって一定のエリアから持ち出さないようにしたのである。



このような祭祀に使用した土器に対する忌避行為は集落の移動に際しても行われていた可能性が、廃棄された土器から読み取れるのではないだろうか。それは民俗例における竈（へつい）の神や地鎮祭の地霊に代表されるように日常生活のすべての事象に超越者・神が関わっていると認識が芽生えていたのではないかと推定できる。もちろん、そのような民俗例を直接なぞらえるには、大きな時間の隔たりが存在しているとする批判はあろう。しかし、このように考えたとき日常生活で使用された土器は超越者・神の依代となり、祭祀専用土器・祭祀転用土器と似通った取扱いが成された理由を容易に導くことができる。廃棄された土器は朱彩や穿孔を施していないが、廃棄することによって他者の再使用を禁止でき、さらに区画溝に廃棄することによって生活空間というエリアを越えることはないのである。

## 6. 土器の変化について

これまで、溝へ土器を廃棄するという行為について述べてきた。次に廃棄された土器について気づいた点についてみていこう。これまで述べてきたように廃棄された土器は一括性の高いものである。廃棄という行為は弥生時代後期全般にわたっており、それぞれの土器群は各時空間の日常生活雑器の全体像を表しているものと思われ、土器の形態や器種構成の変化をとらえることができる。列挙すれば(1)小型化、(2)無文化、(3)甕の増加である。

- (1) 小型化 高さが30cm以下のものが主流となる。とくに後期後半以降においては顕著になる。
- (2) 無文化 簾状文や凹線文に代表される中期の華麗な装飾が影をひそめ、とくに甕はタタキやハケなど成形時の工程が残される。
- (3) 甕の増加 壺の出土比率が下がり、甕が増加する。

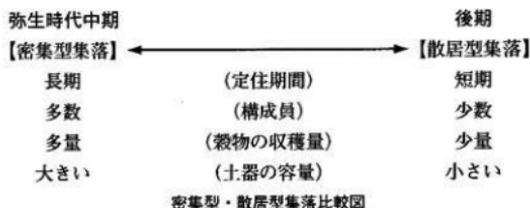
(1) 土器の小型化 丸山竜平氏は弥生時代後期末における稲初貯蔵用壺の小型化は穀物を貯蔵する倉庫の成立によって導かれたものとした。そして、集落内に倉をもつ単位集団の成立は単位集団の変化を意味し、古墳の成立に関連付けた。(註12)しかし、稲初貯蔵に際しては総収穫量が一定ならば、袋での保存あるいは稲束のまま保存するなど貯蔵方法に変化がないかぎり、倉庫の有無に係わらず、貯蔵用土器は必要と考える。このため、貯蔵用壺と倉庫との相関関係は把握できないと思われる。都出比呂志氏は、貯蔵壺だけではなく、煮沸壺なども小型化することと器種構成の変化をも視野に入れ、「土器を使用する人間集団内の貯蔵や煮沸の単位の変化を暗示しており、(中略)生活様式の変貌を反映しているもの」と考えた。(註13)。

アプローチは異なっているが、両氏が説くように様々な土器の変化は社会に密接に関連したものであろう。中期から後期にかけて最も大きな変化は環濠集落に代表される密集型集落の解体あるいは縮小である。密集型集落の解体は弥生時代中期末葉から進行する。河内平野においては亀井、恩智などの集落が縮小していく。この集落の解体について寺沢薫氏は、上層指導者の居住域である特定区画が環濠内から出て居館として独立し、上層指導者層は民衆が環濠で防御することを嫌い、放棄させたのではないかと推定している。(註14)また、最近、秋山浩三氏は「後期水田では、自然地形を克服した完成度の高い水利システムの獲得によって、それまでと同じような調整と集住の必要性がなくなり、大型集落の解体を誘発する背景が出現する。」として、農業水利の発展から集落の解体を説いている。(註15)

密集型集落の解体・縮小は構成員の拡散を招き、多数の小集落である散居型集落の形成を促した。散居型集落では構成員の比率が減少することにより密集型集落よりも穀物の総収穫量は少なくなる。密集型集落では穀物の共同管理を行っていたと考えられており、貯蔵に際して大きな壺や壺が必要であったが、散居型集落では貯蔵可能な余剰物が減ったために大きな土器の必要性が薄れたものと推定される。

また、弥生時代後期は首長の支配が強固となる古墳時代に向けて新たな体制への枠作りが進行している時代であり、ヒエラルヒーの確立によって有力者層の権力の増大に伴い、軍事や使役(墳丘墓構築)による労働力の搾取、穀物の収奪システムが構築されつつあった時代と考えられる。(註16)労働力の供出による農業生産従事力の減少があったであろうし、収奪物の増加は余剰物の減少を導くという反比例の状態になっていったであろう。

以上のように散居型集落形成による総収穫量の減少と有力者層による収奪システムの確立が、集落の取り分となる穀物を目減りさせたことにより、土器の小型化が進んだものと考えられる。



(2) 無文化 都出比呂志氏は土器の施文について集団規制との関係を想定し、共同体紐帯の変質と新たな共同体の再編がそれに影響を与えたものと考えている。(註17)同様な考え方として桑原久男氏は描文型器種から非描文器種への変化と習俗の変化を指摘している。(註18)

共同体の紐帯の変質は無文化の理由の一つとはなるが、畿内の土器への影響の大きさを考えると、それだけとは言いがたい。むしろ量産体制の確立（註19）による製作工程の省力化が無文化の第1の要因と考えたい。弥生時代中期末に位置づけられる西ノ辻N式併行期ではヘラミガキ調整のみの土器が散見され、すでに無文化が始まっているが、中期の形態を保っている。しかし、後期になると形態が大きく変化する。それは分割成形技法・タタキ技法等の省力化システムを導入した土器製作が、土器への意味付けを排除し、ツールとしての性格を全面に押し出した結果である。その意味において、都出氏が第四様式までの土器を原始土器と定義したことは肯定できる。鉢製作の延長上に壺や甕があることや高杯脚部の中実化・壺などの器壁が厚くなったこと、口縁端部形態の単純化などは製作工程の省力化システムが整ってきたことがうかがえるものである。当然、土器製作時間も短縮（乾燥を含めた製作日数）している。このような製作工程の省力化と無文化とは同一様のなかでとらえることができる。すなわち、ツールとしての機能特化を命題とした土器作りは、付加価値を添付することなく、時間の短縮と装飾性の排除を目指したのである。

（3）甕の増加 後期における甕の増加についてはこれまで多く語られているところである。久宝寺遺跡S D6005は54%、恩智遺跡S D13は47%、神山遺跡では41%が甕の出土比率であり、段上遺跡溝100では口縁部による総個体数2292点のうち63%が甕という数字がでており、集落で使用される土器のうち甕が半数近くを占めていることがうかがえる。また小型の鉢の出土が顕著になり、古墳時代初頭になると高杯の数量が増加することになる。鉢の増加は、分割成形技法による甕の製作工程の一貫と考えることができよう。高杯については、木製高杯との関連を考えなければならないが、日常雑器製作において回転台を使用しなくなったことなどがその要因といえる。

それではこうした甕の出土比率の増大は何を意味するものであろう。溝から出土した土器は破損により廃棄されたものも含まれているが、大部分はこれまでみてきたように集落の移動などに伴って廃棄されたものであり、一括性の高いものであった。すなわち、集落全体で使用されていた土器の構成比率を表していると考えられるのである。そして、多量の甕は短い時間に使用されたものであって、長時間を有して堆積したものではない。しかし、これまでみてきたように集落は縮小傾向にあり、構成員が増加したとは考えられない。

構成員の人数に因らないものであるのなら、調理器具の使用方法の変化と食器構成の変化があげられる。調理器具の使用方法の変化については、壺に与えられていた役割が甕に移り変わったとする説がある。（註20）これは墳墓からの出土例において、壺に付着する煤の比率は低下し、甕の煤付着率は高くなっていることから、中期における壺の社会的役割が後期になって甕に置き変わったとするものである。

食器構成の変化は土器の小型化と関連がある。前述している余剰穀物の減少は、食料が乏しくなったことを意味し、調理用食器と供膳用食器を区別する必要性が希薄になったことが考えられる。すなわち、穀物を煮炊した甕をそのまま使用して食事を行っていたことが想定されるのである。調理兼供膳食器とする想定は、後期における甕の増加を説明することができる。

このように二つの理由が考えられるが、こうした複合した理由によって起こった現象と推察される。後期の壺は体部に対して口縁部が小さくなり、液体やその他を貯蔵するのに適した形態で

あり、中期に甕に担わされていた貯蔵という役割部分をも壺に移行したことが容易にみとれる。また、甕は成形方法から鉢の延長線上にあり、内容物を多く入れることのできる鉢といってもよい形態を有していることは、様々な用途に適用するものであると考えられる。このように形態からみても甕は調理・貯蔵・供膳のすべての用途に用いることのできるものであったため、増加したと理解することができるのである。

## 7. まとめ

弥生時代後期において溝や土坑に大量に廃棄された遺構についてみてきた。その特徴は①土器の一括性、②遺構の独立性、③遺構の断絶性であることが確認された。出土する土器については祭祀に関連した祭祀専用土器や祭祀転用土器以外にも完形土器の出土が高い比率を占め、それらの土器は集落の移動の際に集落の縁辺にある溝に廃棄されたものと考えた。廃棄の背景には祭祀関連の土器が、穿孔・打ち欠きを行って祭祀以外の事象での使用忌避と一定エリア内で廃棄していたのと同様に、他者の利用の忌避と居住エリアからの持ち出しが禁止されていたものと推定した。しかし、それは中期から引きずっている祭祀と同じメカニズムのなかで行われていた行為に過ぎず、中期と後期における精神的な変化は認められない。その意味で、密集型集落である環濠集落が崩壊して居住形態の変化あるいはヒエラルヒーの確立が進行していようともし文脈のなかで語られるべき時代であることがわかる。

溝に廃棄されていた土器には(1)小型化、(2)無文化、(3)甕の増加という3つの特徴がある。小型化は、中期の環濠集落などの密集型集落から後期の散居型集落への転換によって総収穫量が減少したこと、指導者層の権力増大に伴うヒエラルヒー形成による労働力の搾取や穀物収奪システムの構築が、余剰穀物の減少を促進したことによってもたらされたと考えた。無文化については土器製作工程の省力化が第1の原因と考え、ツールとしての機能特化を目指した土器作りが、装飾性の欠如をもたらしたと推定する。さらに省力化は器種構成の整理を促し、調理方法や食器構成の変化が起こり、甕の増加がもたらされたと考えた。

以上、弥生時代後期における溝から出土した土器について述べてきた。後期に発生した土器製作工程の省力化は精製土器である小型器台や小型壺、器壁の薄い庄内甕が出現するまで進行したものと考える。この省力化は畿内における土器製作技術の低下をもたらしたと推定している。それは庄内甕における内面ヘラケズリ技法が瀬戸内沿岸地域の技術を導入していると考えられることや小型器台脚部が古式のタイプでは山陰地域のX字脚と同様であることなど他地域の強い影響を受けていることからうかがえる。さらに庄内式期から布留式期において大型土器、特に複合口縁壺が讃岐から搬入されたことは河内における大型土器製作技術の欠落を示唆するものと考え、今回のテーマとは異なることからいざれ検討を行いたい。

### 参考文献

- (1) 森岡秀人 1985『弥生時代暦年代論をめぐる近畿第V様式の時間幅』『信濃』第37巻4号 信濃史学会
- (2) 沼 齋 2000『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10 八尾市教育委員会
- (3) 西村公助 1985『弓削遺跡(第1次調査)』『昭和59年度事業概要報告(財)八尾市文化財調査研究会
- (4) 菅原章太・岩間俊之・横原美智子 2002『段上遺跡第12次発掘調査概要報告』東大阪市教育委員会

- (5) 田代克己・今村道雄・阿部幸一・曾我恭子他 1980『愚智遺跡Ⅰ』瓜生堂遺跡調査会
- (6) (5)と同じ
- (7) 亀島重則 1990『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ』大阪府教育委員会
- (8) 浦 斎 1996「大阪合遺跡(95-104)」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会
- (9) 上林史郎・山田基子美 1989『神山遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
- (10) 田代克己 1986「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『鳥越憲三郎博士古稀記念論文集』雄山閣  
1993「一括して廃棄された土器」『日本文化史研究』第18号 帝塚山短期大学日本文化史学会
- (11) 浦 斎 2000「河内平野の弥生後期集落の成立について—田井中遺跡と弓削・本郷遺跡をモデルとして—」  
『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10 八尾市教育委員会
- (12) 丸山竜平 1977「弥生式土器の終焉—稲初貯蔵用壺の消滅と古墳文化の成立基盤—」『古代研究』10 元興寺  
仏教民俗資料研究所  
1977「弥生時代から古墳時代へ—近江における最古の土師器を求めて」『古代研究』12 元興寺  
仏教民俗資料研究所
- (13) 都出比呂志 1982「畿内第五様式における土器の変革」『小林行雄博士古稀記念考古学論考』平凡社
- (14) 寺沢 薫 1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- (15) 秋山浩三 2001「河内湖岸域における初期弥生水田をめぐって—志紀・田井中遺跡の弥生時代前期～中期  
前業水田の位置づけ」『志紀遺跡(その2.3.5.6)』(財)大阪府文化財調査研究センター
- (16) 労働力の搾取については、水利事業や墳墓の築造に従事させられたと考えられる。庄内式期の例であるが、  
纏向遺跡において、多くの他地域産の土器が出土することから想定することができる。また、こうした労働に  
従事する人々は自分の食料を持参した(させられた)可能性もある。穀物の取奪についても土器の移動から考  
えることができる。ただし、発展段階であった有力者層が治めることのできる範囲が近隣に限られていた場  
合、土器に特徴が無ければ見極めは難しいであろう。
- (17) (13)と同じ
- (18) 桑原久男 1989「畿内弥生土器の推移と二期」『史林』第72巻第1号 史学研究会
- (19) 田辺昭三・佐原真 1989「弥生文化の発展と地域性—近畿」『日本の考古学』Ⅲ弥生時代 河出書房
- (20) 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』史学叢 第26号 大阪大学文学部

## 第6章 まとめ

今回実施した久宝寺遺跡第29次調査は、旧国鉄竜華操車場跡地を中心とする大阪竜華都市拠点地区の基盤整備事業に伴う新設道路予定地（竜華東西線）を調査対象としたものである。旧国鉄竜華操車場跡地内では平成9年度以降、主要建物や基盤整備事業に伴う発掘調査が本調査研究会と（財）大阪府文化財調査研究センター（現（財）大阪府文化財センター）により継続して実施されており、弥生時代中期以降の遺構・遺物が数多く検出され、その成果の一部は既に報告書として刊行されている。

ここでは、今回の発掘調査で得られた考古学的知見を旧国鉄竜華操車場跡地内および周辺で実施された調査成果を含めて、弥生時代中期後半以降の集落推移を概観してみる。

### 弥生時代中期後半

2 調査区の第6面で検出された畦畔状遺構6001およびこの上面から構築された埋竈6001がある。畦畔状遺構6001については、この遺構に関連した水田作土が確認されていないことや検出された地点の地層状況から湿地状の環境が想定されるため、このような部分に設けられた道路的な性格が推定される。北接する久宝寺遺跡第33次調査（KH2000-33）では当該期の水田が検出されていることから、生産域と居住域を繋ぐ道路と推定すれば調査区南部一帯に当該期の居住域の存在を想定することも可能である。また、本遺構の上面で検出された埋竈6001については、埋設状況から当初土器棺墓と想定したが、微細遺物分析、土壌理化学分析、脂肪酸分析からも現時点においては人体埋葬を積極的に示唆する内容に乏しいものとされており、墓以外の設置理由を他方面から推定する必要がある。

当該期における居住域の中心は調査地の南部に近接する跡部遺跡が想定される。跡部遺跡内東部の春日町3丁目、東太子1丁目で行われた跡部遺跡第10次調査（AT92-10）、第12次調査（AT93-12）、第13次調査（AT93-13）では当該期の居住域が検出されている。なかでも、第13次調査（AT93-13）では、東西方向に並行して伸びる4条の溝が検出されている。米田敏幸氏は、これらの溝群が集落域の南東部を区画する環濠溝となる可能性を示されている。推定された環濠範囲との整合性については資料の蓄積を必要とするが、跡部遺跡の弥生時代前期～後期における居住域の中心としては首肯できるもので、居住域からみて北西部一帯の久宝寺遺跡の南東部に当該期の跡部遺跡の生産域が広がっていたことが明らかとなった。

### 弥生時代後期前半

2 調査区東部から3調査区西部の6面で検出された畦畔状遺構6003～畦畔状遺構6005がある。畦畔状遺構6001と同様、作土を伴うものではなく道路等の性格が推定される。盛土内部から弥生時代後期前半の土器類が比較的まとまって出土しているが、完形のものが含まれていないことから、祭祀的な側面よりも畦畔自体の補強を目的として埋設された可能性が高い。当該期の居住域は前代と同様、南東部の跡部遺跡との関係が推定される。

### 弥生時代後期後半

4 調査区で検出した土器集積群（SW6001～SW6006）がある。SD6005の両岸に形成されたもので、完形品を含む良好な資料である。ただ、これらの土器集積を検出したにも拘わらず同時

期の遺構や明瞭な包含層が形成されていないことから、調査地点は居住域の中心よりやや離れた場所に位置し、土器の廃棄場所としての役割を果たした遺構であった可能性がある。

中河内地域の弥生時代後期後半の集落については、環濠集落の解体に連動して小規模で等質的な集落が点在する散材的な集落形態に移行していたことが近年の調査成果として明らかにされている。これらの事実は検出された集落・遺物の減少として如実に現れており、当該期の土器組成の実体が不明瞭である要因の一つであった。このような状況の中にあって今回検出された土器集積群を構成する土器類は質、量ともに豊富であり、今後、中河内地域における弥生時代後期後半の指標となる資料と考えられる。

#### 古墳時代初頭前半（庄内式古相）

2調査区で畦畔状遺構6002が検出されている。弥生時代中期後半の埋壙6001が検出された畦畔状遺構6001の上面に作られたもので、この時期まで踏襲され道路としての機能を果たしたものと推定される。

#### 古墳時代前期前半（布留式古相）

2調査区～4調査区西端にかけての第5面で水田を中心とした生産域が検出されている。小区画を中心とした水田で89筆が検出されているが、さらに南北方向への広がり推定される。これらの水田は2調査区東部で検出された道路状遺構5001を境として区画形状に差異が認められることから、水田の開発時期の差や管理集団の違い等の要因が考えられる。当該期の居住域は現時点では確認されていないが、西接する久宝寺遺跡第24次調査（KH98-24）の4～7調査区では当該期の自然河川が確認されており、北西～南東に流路を持つことから、これらの流路の右岸（北側）を中心に展開した生産域であったことが推定される。当該期の居住域は生産域の南東部に近接する跡部遺跡内の第5次調査（AT89-5）、第23次調査（AT96-23）で検出されている。墓域としては、北西約350m地点で（財）大阪府文化財調査研究センターにより実施された多目的広場の調査で久宝寺1号墳が検出されている。

#### 古墳時代中期

1～4調査区の各調査区で検出されている。全体的に散発的な分布で、前半のものは少なく中葉～後半のものが中心となる。1調査区で検出されたSE4001の井戸側は準構造船の部材が使用されており、新たに準構造船の資料を追加する結果となった。久宝寺遺跡内では久宝寺南（その2）で古墳時代初頭後半（庄内式新相）の準構造船が発見されており、古墳時代初頭後半においては河内湖や旧大和川水系を介して久宝寺遺跡が西方からの文物を中継する「津」的な役割を果たした遺跡の一つであると考えられてきた。今回の発見はさらにそれらの事柄を補足するもので、遺跡の性格を考えるうえで貴重なものと考えられる。当該期の居住域は西接する久宝寺遺跡第24次調査（KH98-24）や北接する第33次調査（KH2000-33）で検出されており、現時点ではこれらを含めて東西約600m、南北約150mが想定される。特に、第24次調査（KH98-24）で検出された居住域の西部では、中期前半～中葉にかけて南北方向に流下する自然河川（NR30001）とその北側で行われた（財）大阪府文化財調査研究センターによる95-8・9トレンチ、96-1トレンチ、97-1トレンチではこの自然河川に設置された堰1・堰2が検出されており、これらの施設を管理・運営し得る土木技術や構成員を具備した集団であったことが推定される。生産域としては、居住域に近接する北西部で行われた（財）大阪府文化財調査研究センターによる多目的広

場の調査や久宝寺第28次調査（KH99-28）で検出された水田がある。墓域としては現時点では確認されていない。

#### 古墳時代後期

4調査区の東部で検出されている。前半のものとしては、東端部で検出したNR4001およびそれを切る中葉のSK4044がある。古墳時代中期と同様の範囲に居住域の広がり認められるが中期に比して遺構の分布は散発的である。生産域としては、居住域より西部で実施された(財)大阪府文化財調査研究センターの99-2・5トレンチで水田が検出されている。墓域としては、居住域の西部に近接する位置で実施された(財)大阪府文化財調査研究センターの98-1トレンチで検出された横穴式石室を主体部に持つ七ツ門古墳（6世紀中葉）がある。古墳時代後期の河内平野周辺の墓制は、横穴式石室を主体部に持つ円墳を中心とした古墳が生駒西麓部を中心に盛んに造墓され群集墳化する時期にあたる。このような趨勢にあつて七ツ門古墳は平野部に位置し、南東約7km地点の芝山（柏原市国分市場）から産出するカンラン石安山岩の扁平な構築石材を使用した横穴式石室を主体部に持つ極めて特異な古墳である。七ツ門古墳の発見は、当該期に生駒西麓部の群集墓被葬者とは別に平野部でこのような古墳の築造が許された階層が存在したことを物語っている。久宝寺遺跡周辺では、古墳時代初頭前半（庄内式古相）の加美1号墓出土の朝鮮三国時代初頭の陶質土器を嚆矢として、古墳時代中期には韓式系土器等が比較的多く出土しており古墳時代全般を通して河内平野の渡来系文化の門戸としての位置付けの中で比較的安定した集落基盤の継続が看取される。後期後半においては、朝鮮経営の政治顧問として百済から日羅を招き向斗の桑市に館をつくり住まわせる『日本書紀敏達十二年七月（583）』を初めとして、物部守屋と蘇我馬子の仏教の摂取をめぐる争乱『日本書紀用明天二年四月（587）』等があり、調査地を含む当地一体は淡川郡の跡部郷に関わる有力豪族である物部連の本拠地として推定されている。物部連の中には、継体天皇二十一年（527）の筑紫磐井の乱の平定に活躍した物部大連龜鹿火やそのあと大連の地位についた物部守屋の父親にあたる物部尾輿がおり、一族のなかにこのような傑出した人物が輩出されていることから、七ツ門古墳の被葬者を物部連の有力者の一人であった可能性を想定することも強ら間違いないであろう。

#### 飛鳥時代

遺構は3調査区東端から4調査区で検出されている。7世紀中葉の溝や自然河川が中心である。竜華地区内の調査では久宝寺遺跡第23次調査（KH97-23）、第28次調査（KH99-28）、第33次調査（KH2000-33）で居住域に関連した遺構が検出されている程度である。遺物で特筆されるものとしては、1調査区のⅦ-19-4H地区の第3層から出土した飾馬を表現した土馬がある。一方、本調査の4調査区に東接する位置は淡川廃寺の推定地にあたる。淡川廃寺については、数多くの論考があり遺瓦からみて飛鳥時代前半に比定される豊浦寺式の素弁8弁蓮華文軒丸瓦が創建瓦と考えられる。壇越氏族については、西接する跡部町に存在する式内社跡部神社があり、『日本書紀』用明天皇二年（587）四月条の「阿都」に当て、『新撰姓氏録』で物部氏の同祖を称える阿刀氏が有力視されている。さらに、出土瓦の変遷では、8世紀前半においては法隆寺西院伽藍創建時に使用された忍冬唐草文の意匠系譜を持つ軒平瓦と本調査（475）や久宝寺第33次調査（KH2000-33）、淡川廃寺第2次調査（SKT2001-2）出土の複弁8弁蓮華文軒丸瓦の組み合わせが推定できるようになってきた。このように、創建時期から約半世紀の間で瓦当の文様

様式が高句籠様式から新羅様式への変化を遂げたようである。天平一九年(747)の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば法隆寺と四天王寺の寺領が淡川郡に多く、物部氏の旧領地が兩大寺の基本領となっていたことが推定される。大和と難波を結び政治、軍事的にも大変重要であった淡川路の中継地にあたる要衝に位置している淡川廃寺は、8世紀前半には氏寺から法隆寺の寺領としての枠組みの中に組み入れられていたようである。

#### 奈良時代

第2面ないしは第3面の1～4調査区で検出されている。1調査区および4調査区東部で居住域に関連した遺構が検出されている他、3調査区東部から4調査区にかけては溝や自然河川が集中する部分がある。1調査区の中央部で検出された居住域は8世紀中葉を中心とするもので、南部で検出された東西方向に伸びるS D 2065の北部に展開しており、S D 2065に直交するS B 3001およびそれに付随するS E 2003を中心とする居住域内の配置関係が推定される。4調査区の東端で検出されたS E 3003は、丸太分割割抜き井戸に分類される井戸で8世紀前半頃のものと推定される。類例が少ないもので規模、構造ともに特筆される。以上のように、S E 3003は一般的な集落遺構に見られる井戸とは構造を異にしていることから、東接する淡川廃寺に関連した建物に付随した井戸であった蓋然性が高い。第3面の3調査区東部から4調査区中央部にかけて検出された溝(S D 3052)、自然河川(N R 3001～N R 3003)は、一部飛鳥時代に比定されるものを含めて北西-南東方向に流路を持つもので、出土遺物からみてN R 3002(7世紀中葉)→S D 3052(8世紀初頭)→N R 3003(8世紀後半)→N R 3001(8世紀後半)の順に流路位置を変えていたことが推定される。なお、特筆される遺物としてはN R 3003から出土した墨書木簡(180)があり、内容からみて近隣に役所が存在したことが想定できるものであるため、今後周辺で実施される調査では注意を払う必要があろう。当該期の遺構の中心は、1調査区の北ないしは北西に近接する位置で行われた久宝寺遺跡第23次調査(K H 97-23)の18～26調査区、第33次調査(K H 2000-33)で検出されており、現時点では東西約300m、南北約150mに亘って居住域に関連した遺構の広がりが推定される。生産域としては、これらの居住域の南西部で(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された99-1・2トレンチで水田遺構が検出されている。

#### 平安時代後期～末期

1調査区の第2・3面で検出されている。検出された遺構は11世紀全般に亘る居住域を構成する井戸、溝が中心である。旧電筆操車場内での平安時代の集落については、西接する久宝寺遺跡第23次調査(K H 97-23)の15・16調査区、第24次調査(K H 98-24)、第30次調査(K H 99-30)を中心に検出されており、平安時代前期～後期に亘って居住域に関連した遺構の広がりが認められるが密集することなく分散して検出されることが特徴である。

#### 近世

各調査区の第1面で検出されている。生産域を構成する水田、島畑、小溝(畝溝)が中心である。2調査区中央部で検出されたS D 1101については、現地図上で復元される条里区画の坪境の位置にあたるものと推定される。検出された遺構群の構築方向は、このS D 1101付近を境として西側がほぼ座標軸に直交するが、東側の南北軸はN-5°-E-N-10°-Eで主軸方向を異にしている。但し、奈良時代後半～平安時代後半の遺構を検出した2調査区第2面ではS D 1101に先行し同様の性格を持つ遺構は検出されておらず条里区画の施行時期については不明な点を残す

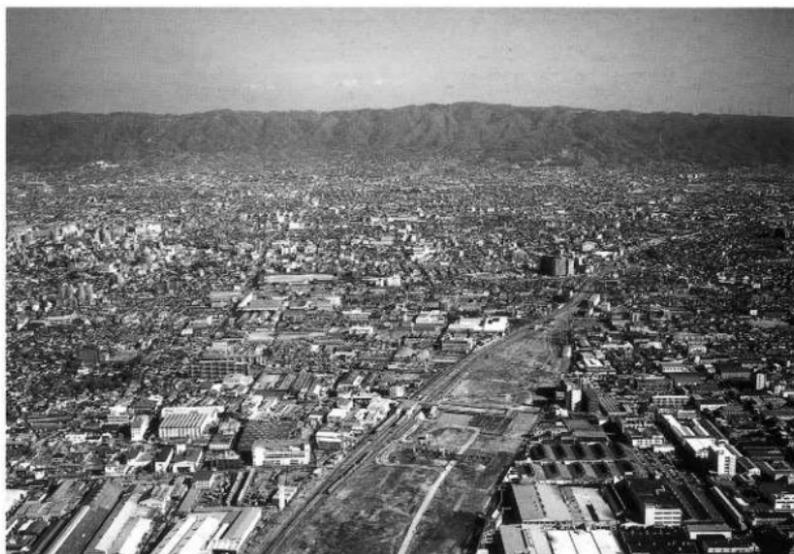
が、本調査地を含む旧竜華操車場東部一体の現地図上で復元される条里区画については、本調査地付近で南部と北部での条里区画の主軸方向を異にしていることが指摘でき、これらの要因が第1面で見られる耕地区画の方位に影響している可能性が高い。

註記

- 註1 成海佳子・樋口 薫・金親満夫 2001「4.久宝寺遺跡第33次調査(KH2000-33)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 西村公助 1997「I跡部遺跡(第10次)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註3 坪田真一 1994「2.跡部遺跡第12次調査(AT93-12)」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註4 坪田真一 1994「3.跡部遺跡第13次調査(AT93-13)」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註5 米田敏幸 1997「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
- 註6 原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書-大阪竜華都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削に伴う-」『(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註7 安井良二他 1991「跡部遺跡発掘調査報告書-大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸-」『(財)八尾市文化財調査研究会報告31』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註8 原田昌則 1997「2.跡部遺跡第23次調査(AT96-23)」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註9 西村 歩 2001「久宝寺1号墳の調査成果-久宝寺遺跡(多目的広場)-」『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回資料)』
- 註10 赤木克規・一瀬和夫 1987「久宝寺南(その2)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 註11 前掲註6
- 註12 前掲註1
- 註13 後藤信義・本田奈都子 1996「八尾市亀井所在 久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書-I R久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う-」『(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第6集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 註14 後藤信義他 1998「八尾市渋川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書II-一般府道住古八尾線付け替え事業に伴う発掘調査-」『(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第26集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 註15 前掲註9
- 註16 西村公助・岡田清一 2000「11.久宝寺遺跡第28次調査(KH99-28)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註17 西村 歩 2001「平成10・11年度 久宝寺遺跡(竜華東西線)発掘調査終了報告』(財)大阪府文化財調査研究センター 内部資料 西村 歩氏のご好意により資料の提供を受けた。
- 註18 赤木克規他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書III」『(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター

- 註19 田中清美 1986「加美遺跡の検討」『古代を考える43』
- 註20 原田昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・樋口 薫 1999「8.久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)」  
『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註21 前掲註16
- 註22 前掲註1
- 註23 坪田真一・金親満夫 2002「淡川廃寺現地説明会資料」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註24 前掲註20
- 註25 前掲註1
- 註26 前掲註17
- 註27 前掲註20
- 註28 前掲註6
- 註29 原田昌則・西村公助・岡田清一 2000「14.久宝寺遺跡第30次調査(KH99-30)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

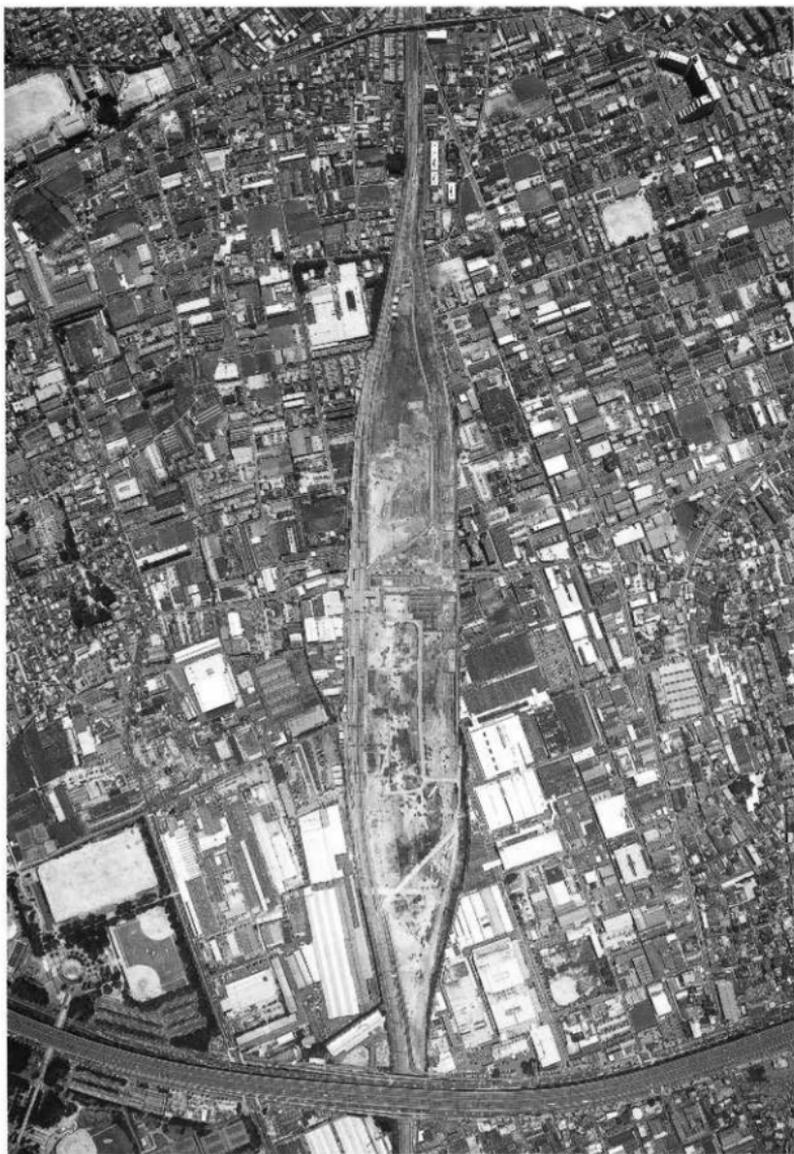
# 图 版



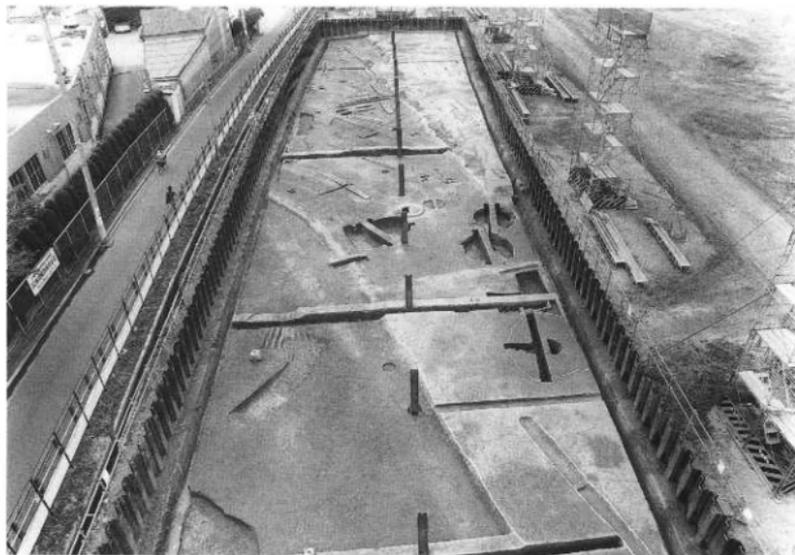
調査地からの遠景 調査地を含む旧国鉄電筆操車場跡地から東方生駒山地を望む(西から)



調査地からの遠景 調査地を含む旧国鉄電筆操車場跡地から西方大阪湾明石海峡を望む(東から)



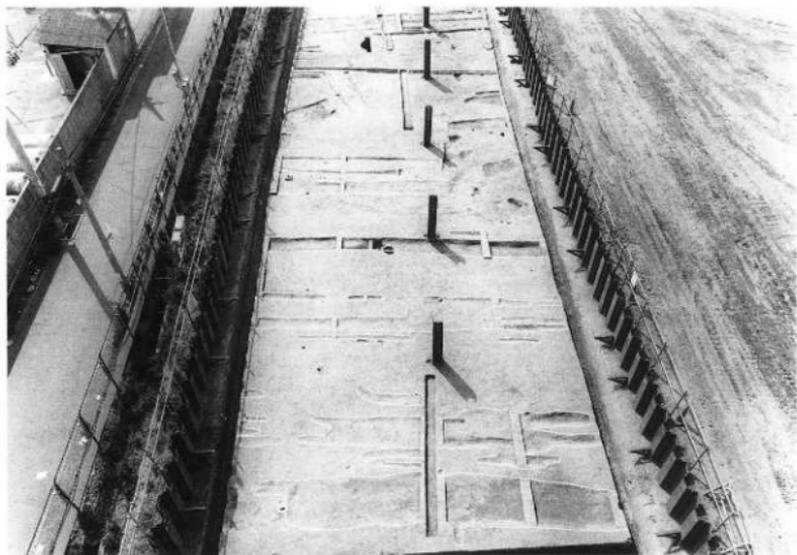
調査地を含む旧国鉄電車操車場跡地全景(上が東)



29-1 調査区 全景(東から)



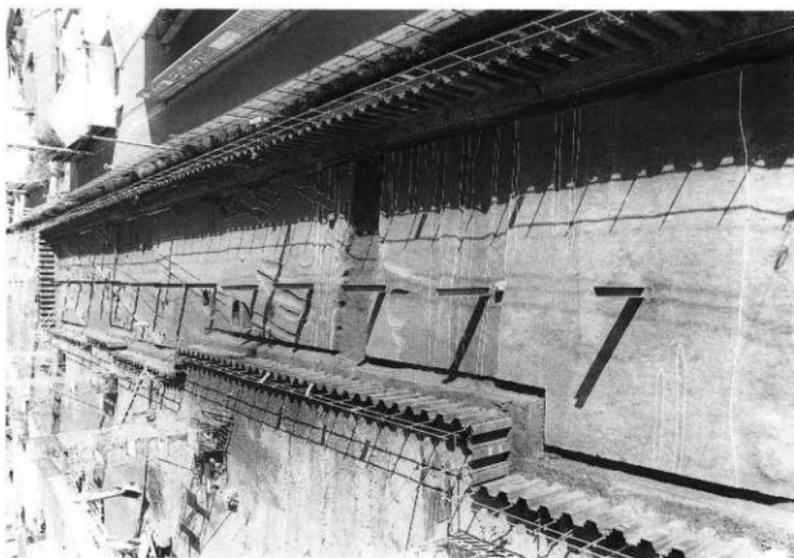
29-2 調査区 全景(西から)



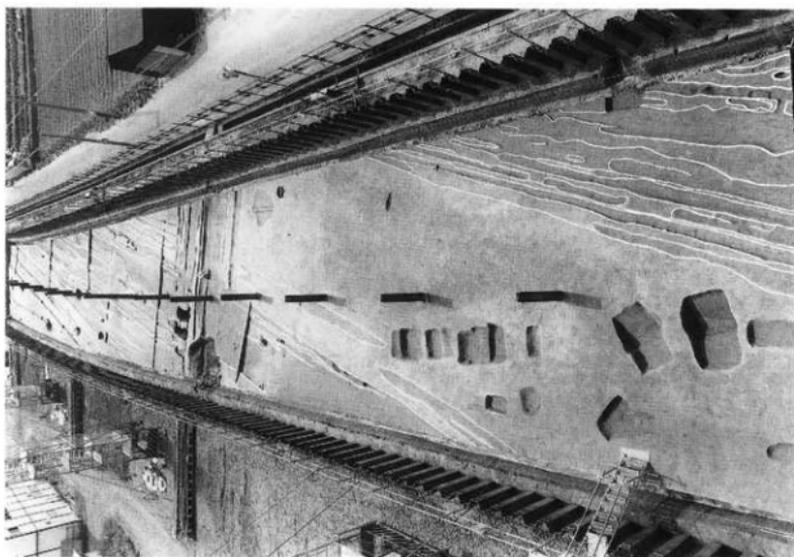
29-2 調査区 東部遺構検出状況(東から)



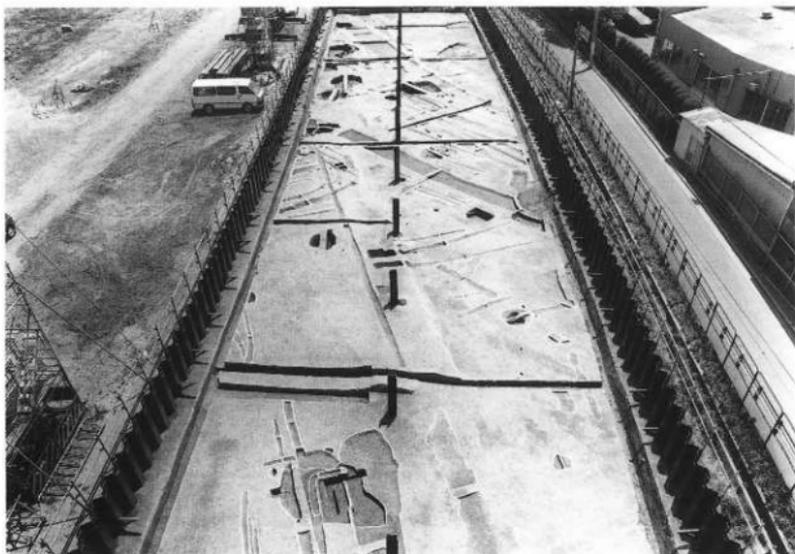
29-2 調査区 西部遺構検出状況(西から)



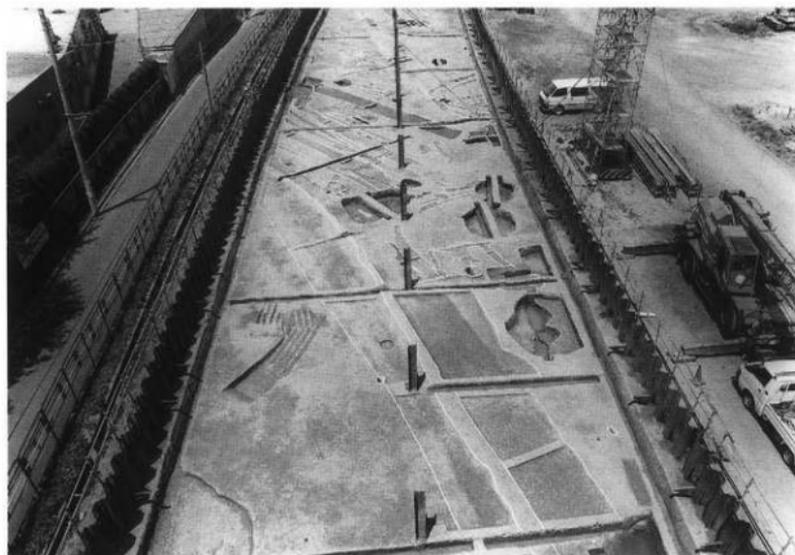
29-3 調査区 全景(西から)



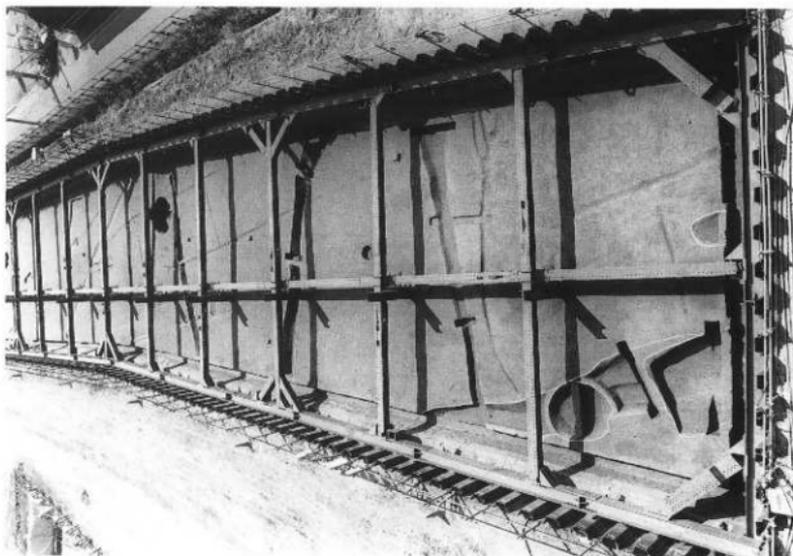
29-4 調査区 全景(西から)



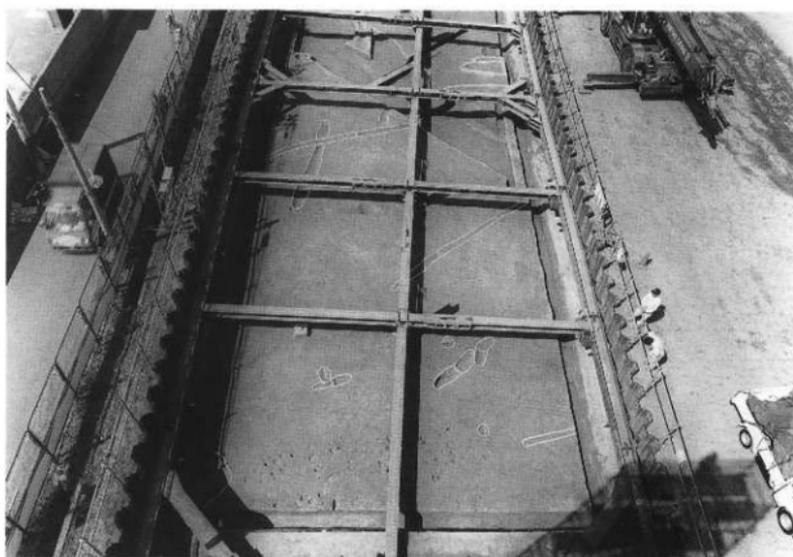
29-1 調査区 全景(西から)



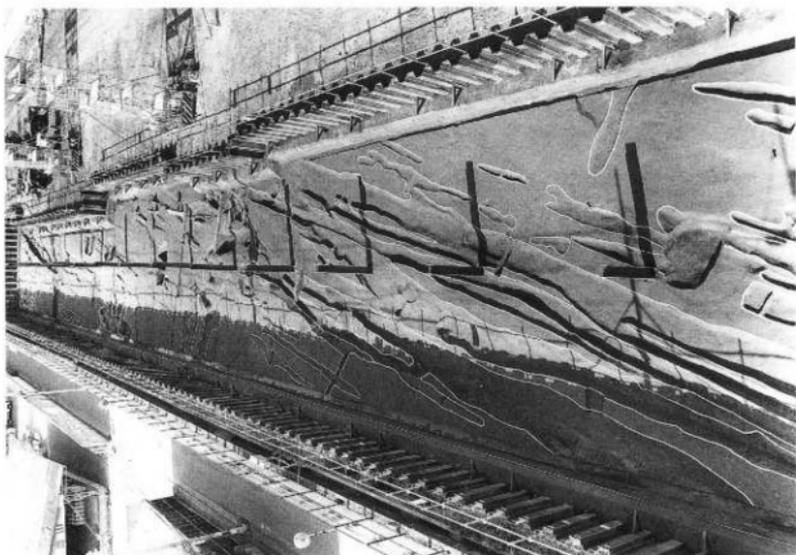
29-1 調査区 全景(東から)



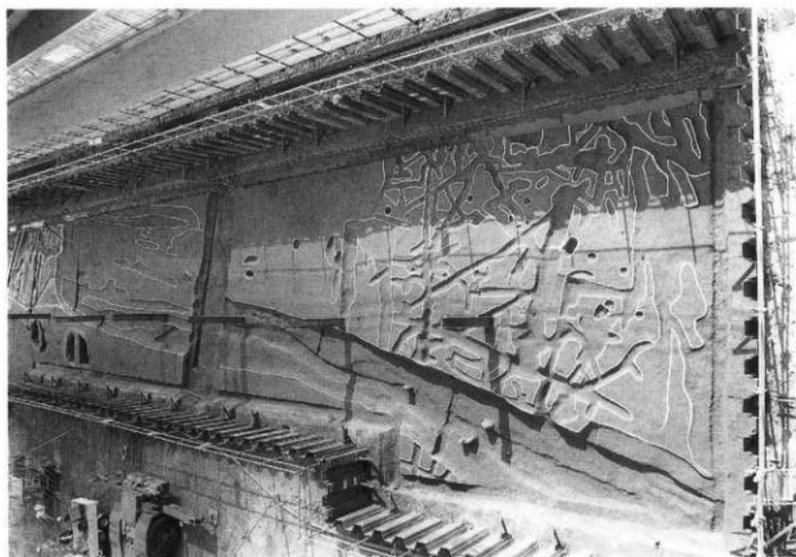
29-2 調査区 全景(西から)



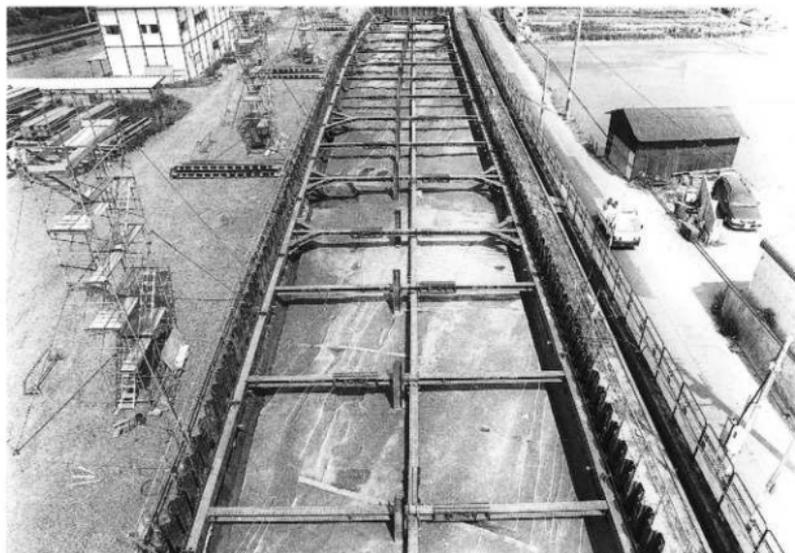
29-2 調査区 東部遺構検出状況(東から)



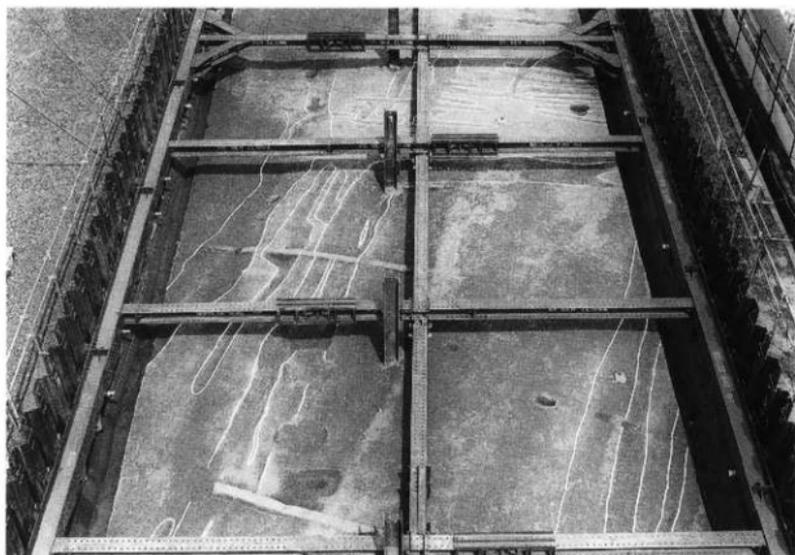
29-3 調査区 全景(東から)



29-3 調査区 西部遺構検出状況(西から)



29-4 調査区 全景(西から)



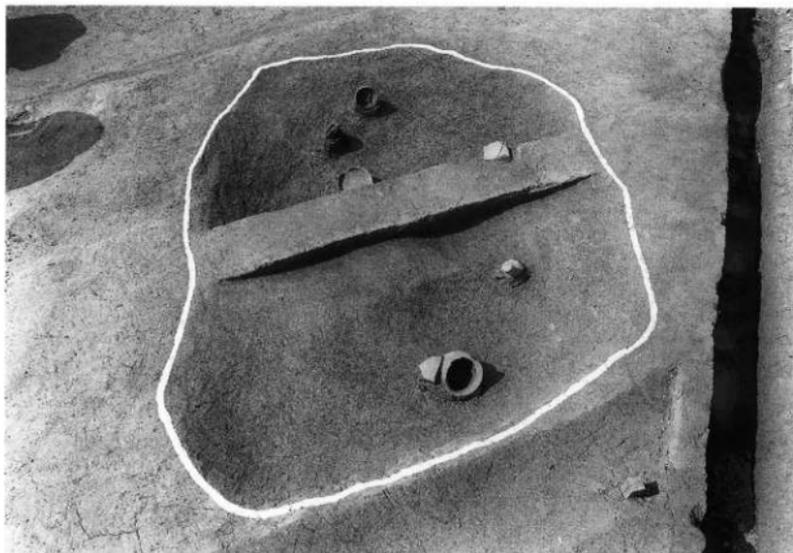
29-4 調査区 西部遺構検出状況(西から)



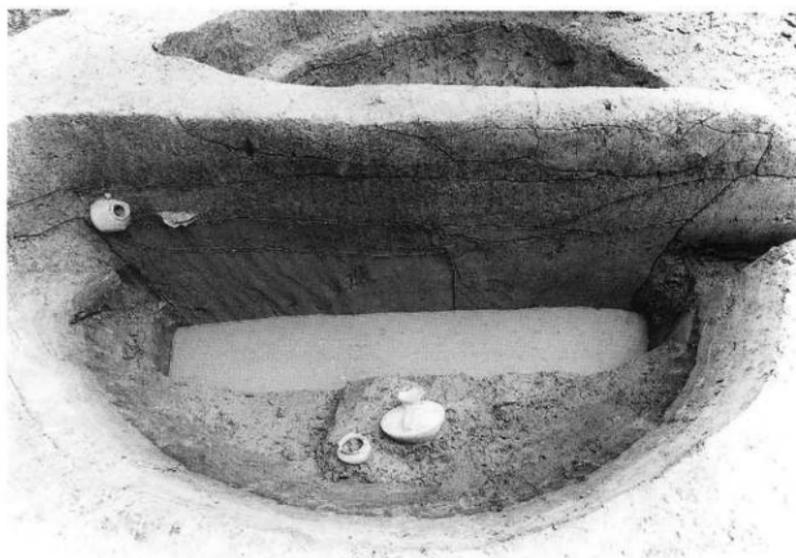
29-1 調査区 S E 2001検出状況(北から)



29-1 調査区 S E 2004検出状況(南から)



29-1 調査区 S E 2003上部(南から)



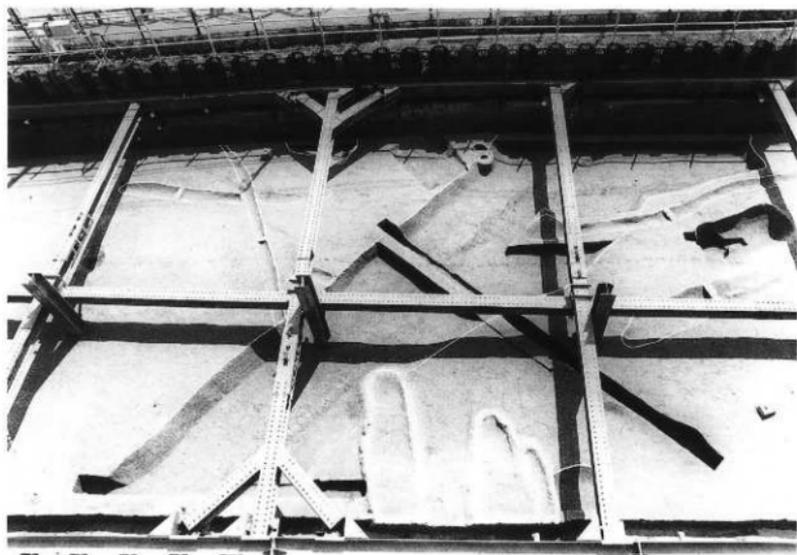
同上 S E 2003下部(北から)



29-1 調査区 S K 2001 検出状況 (西から)



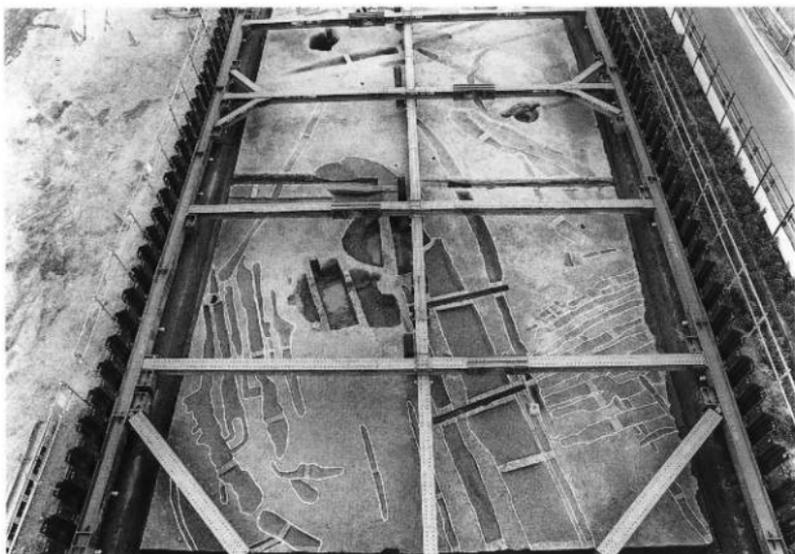
29-2 調査区 S K 2014、S K 2015 検出状況 (西から)



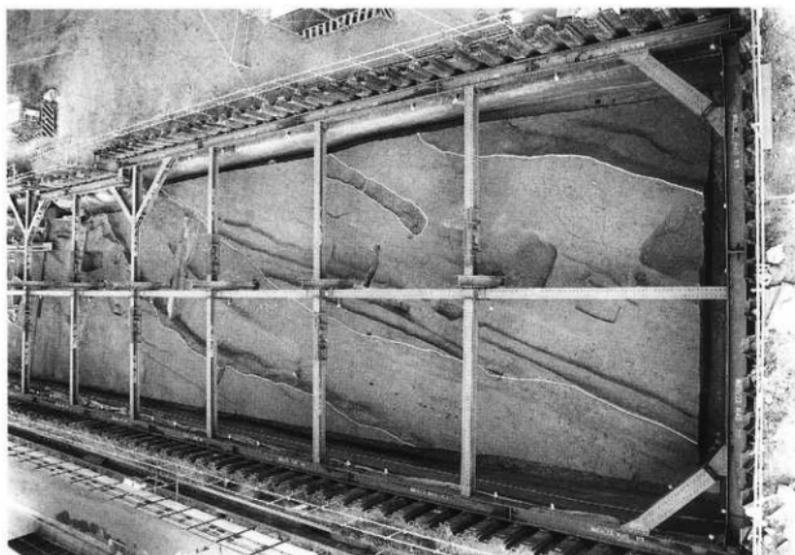
29-2 調査区 NR2001他検出状況(北から)



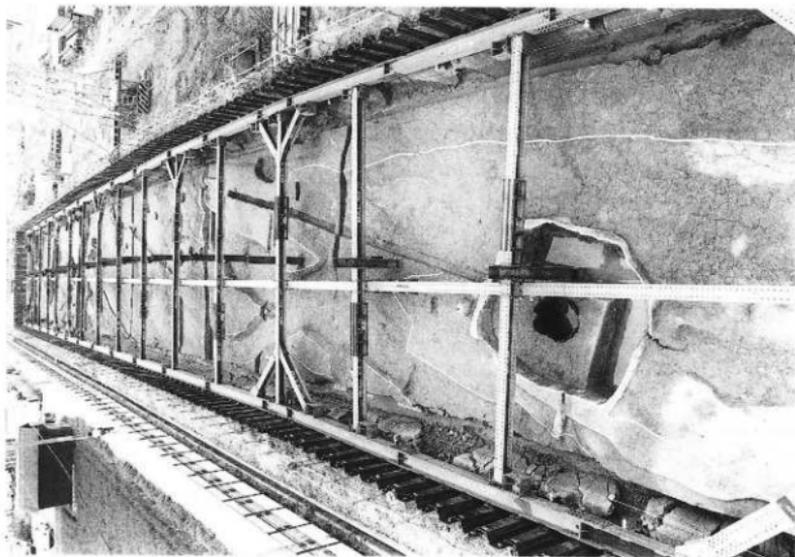
29-3 調査区 SD2084検出状況(東から)



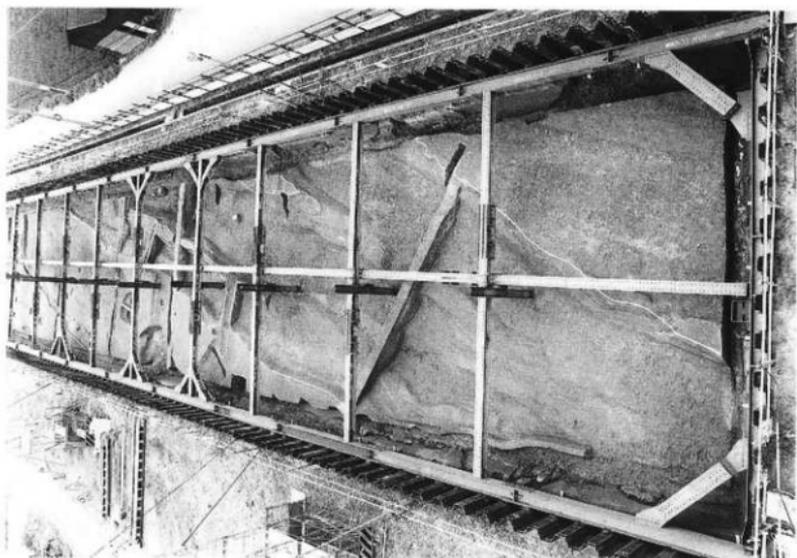
29-1 調査区 西部遺構検出状況(西から)



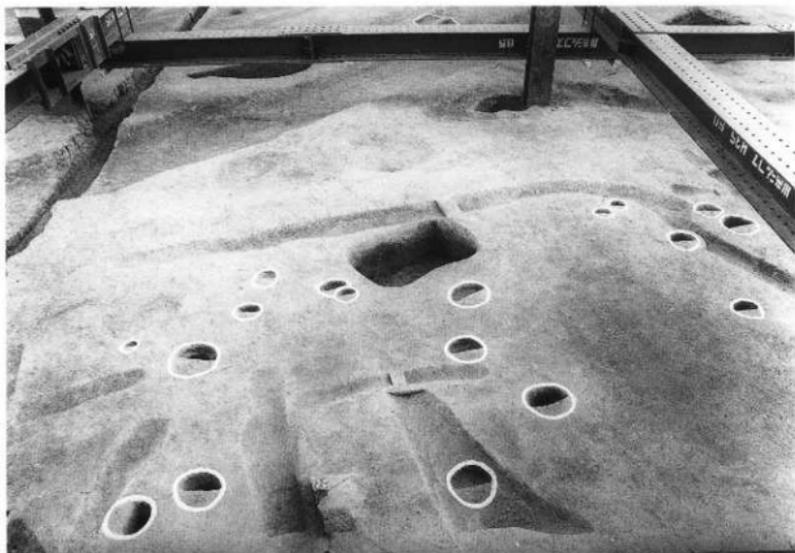
29-3 調査区 東部遺構検出状況(東から)



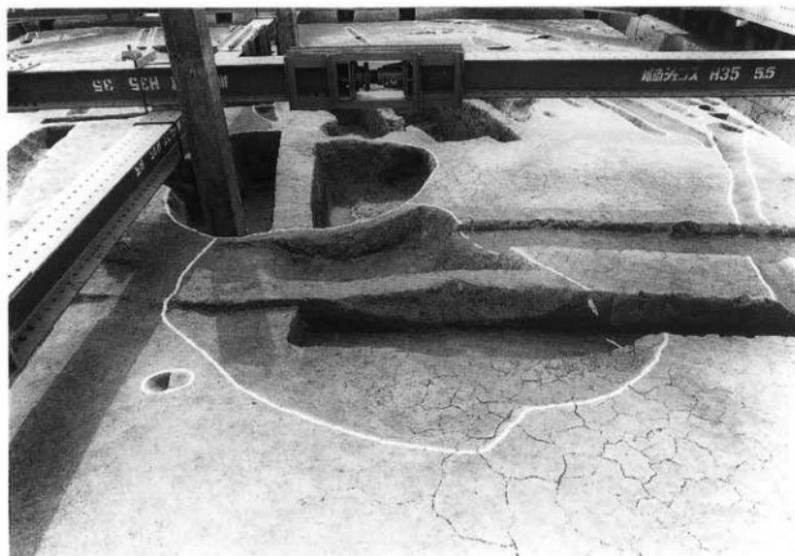
29-4 調査区 全景(東から)



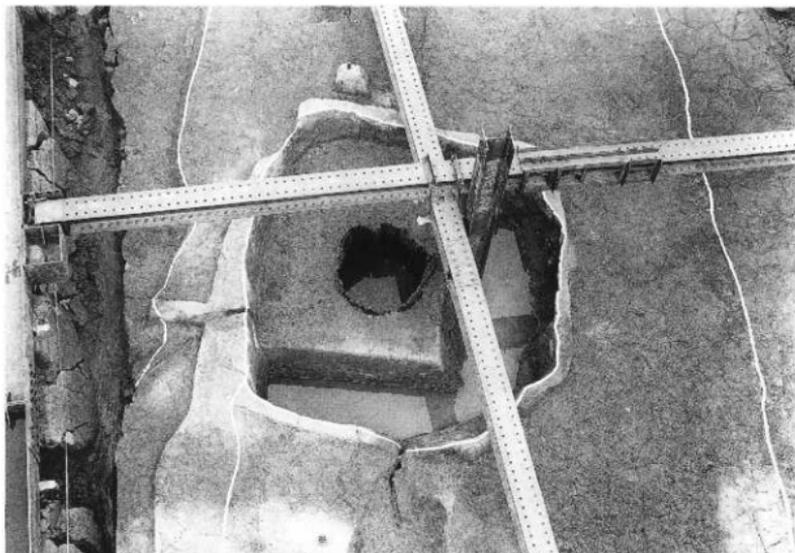
29-4 調査区 西部遺構検出状況(西から)



29-1 調査区 S B 3001 検出状況 (北から)



29-1 調査区 S E 3001、S K 3001 検出状況 (東から)



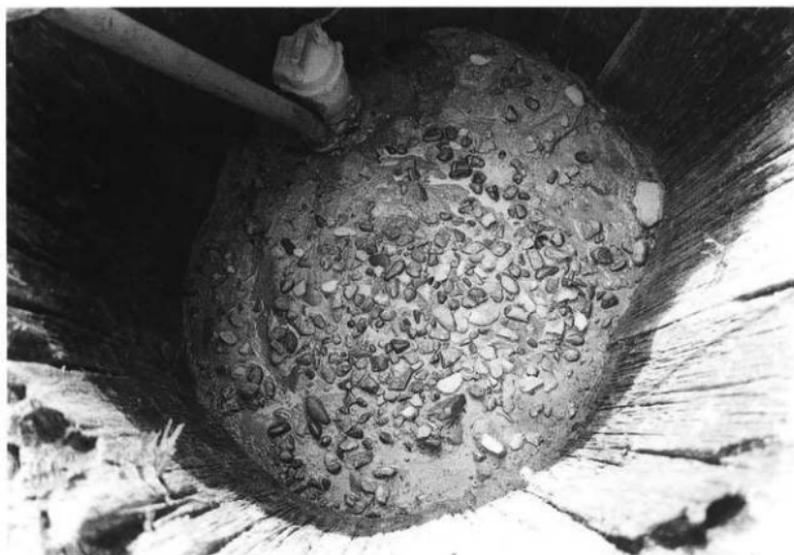
29-4 調査区 SE 3003検出状況(東から)



同上 SE 3003井戸側検出状況(南から)



29-4 調査区 S E 3003遺物出土状況(南から)



同上 S E 3003敷石検出状況(東から)



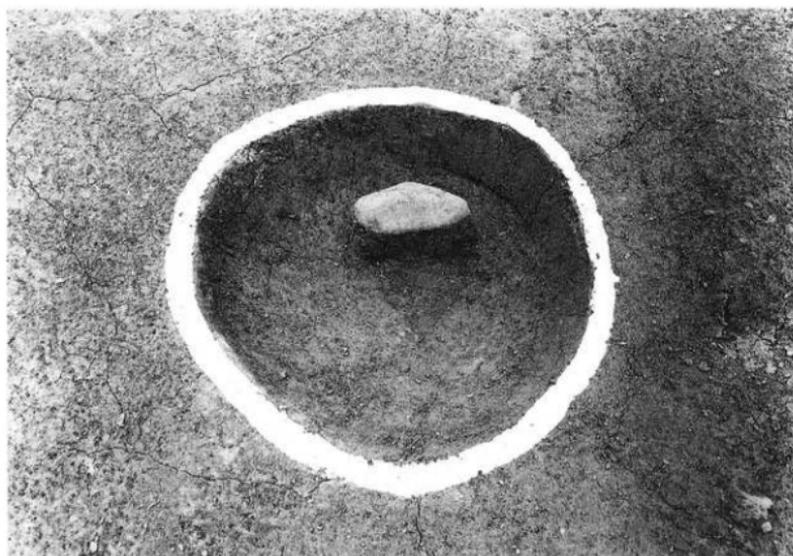
29-4 調査区 SE 3003井戸側断ち割り状況(南から)



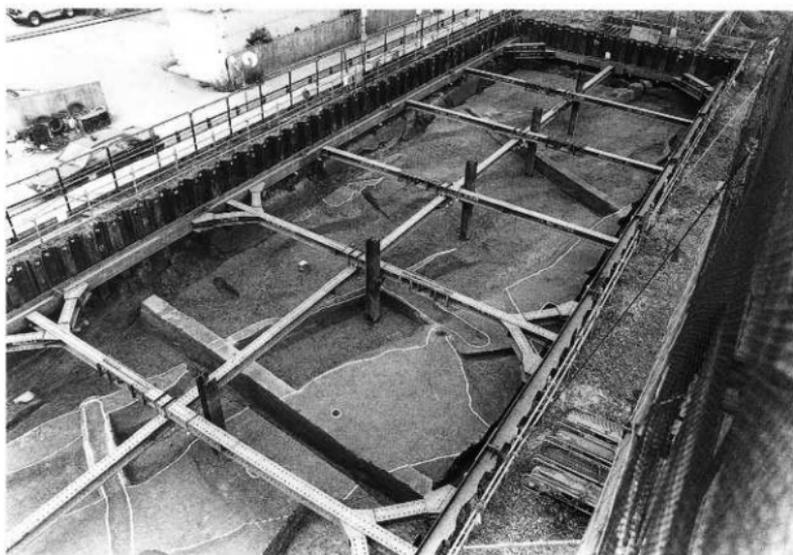
同上 SE 3003細部(南から)



29-4 調査区 S K 3004検出状況(東から)



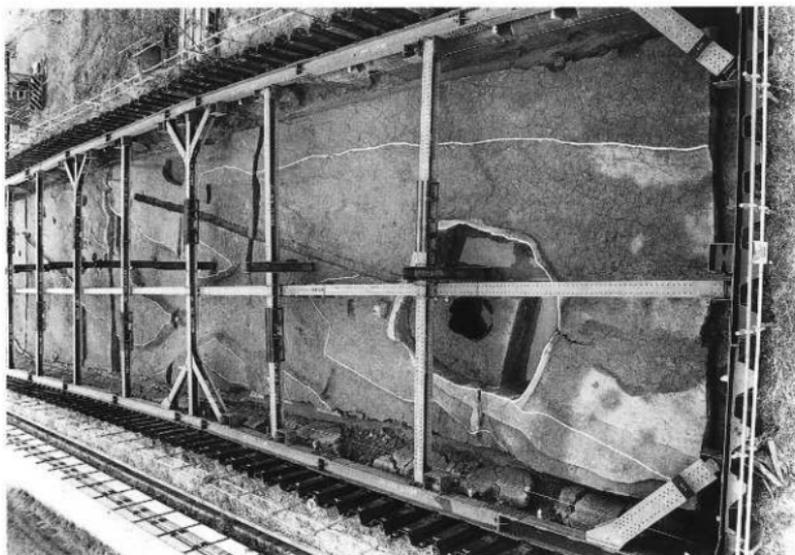
29-4 調査区 S K 3008検出状況(北西から)



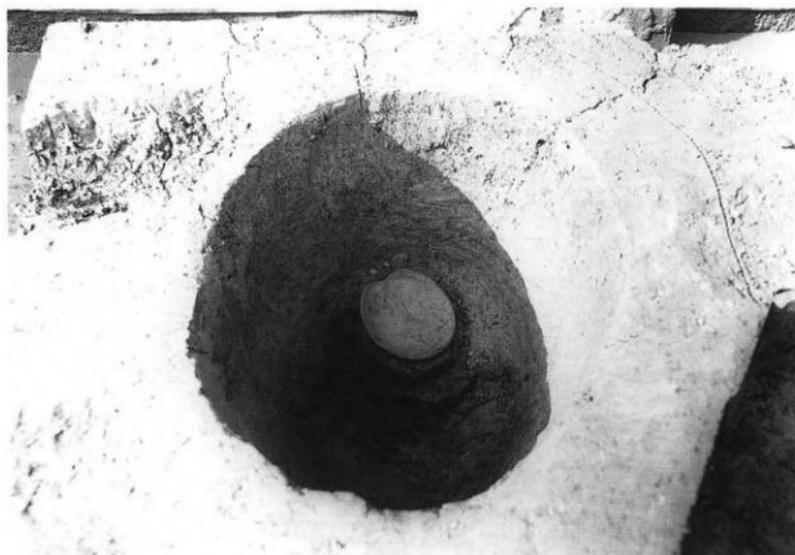
29-4 調査区 S D 3052、N R 3002、N R 3003検出状況(北東から)



同上 S D 3052(右)、N R 3003(左)検出状況(東から)



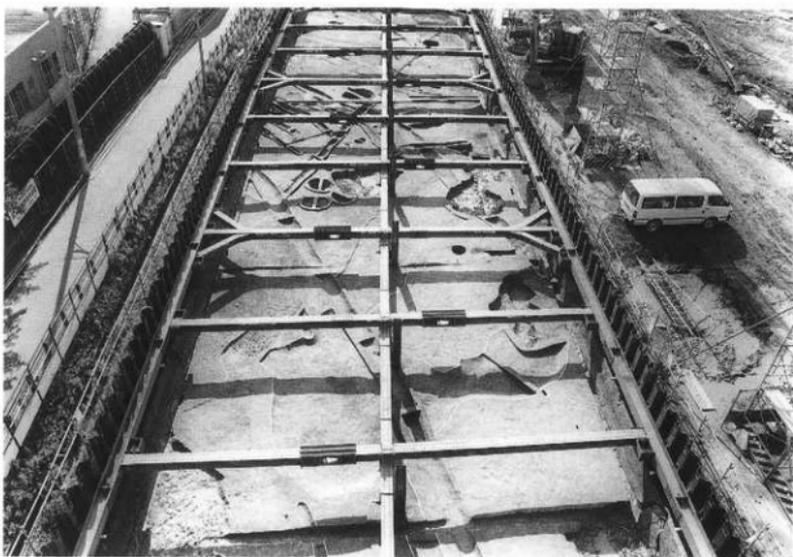
29-4 調査区 S D 3060、S D 3053他検出状況(東から)



29-1 調査区 S P 3001検出状況(南から)



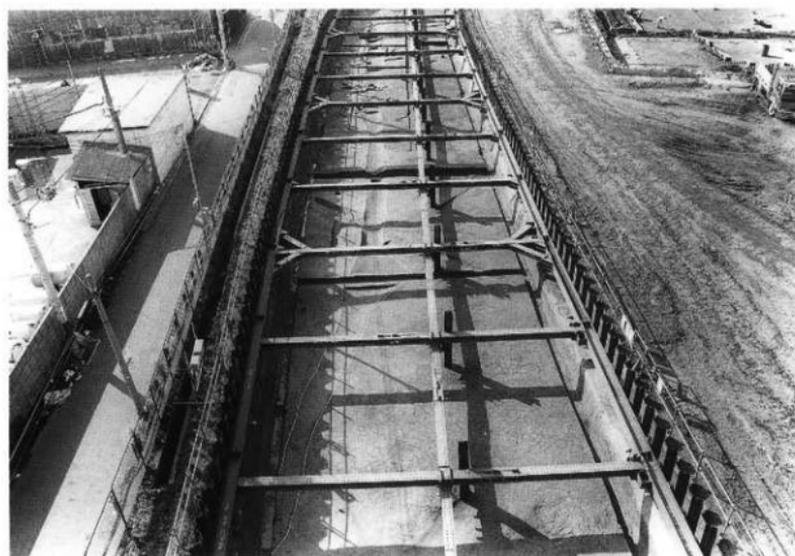
29-1 調査区 全景(西から)



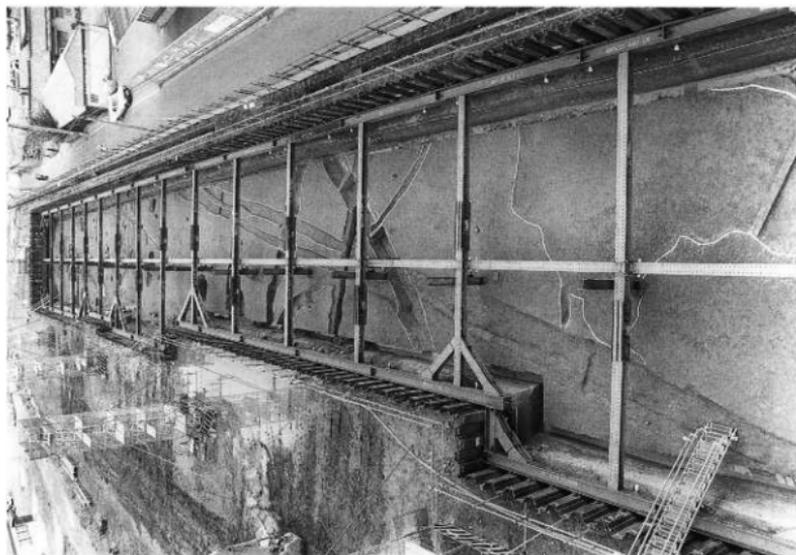
29-1 調査区 全景(東から)



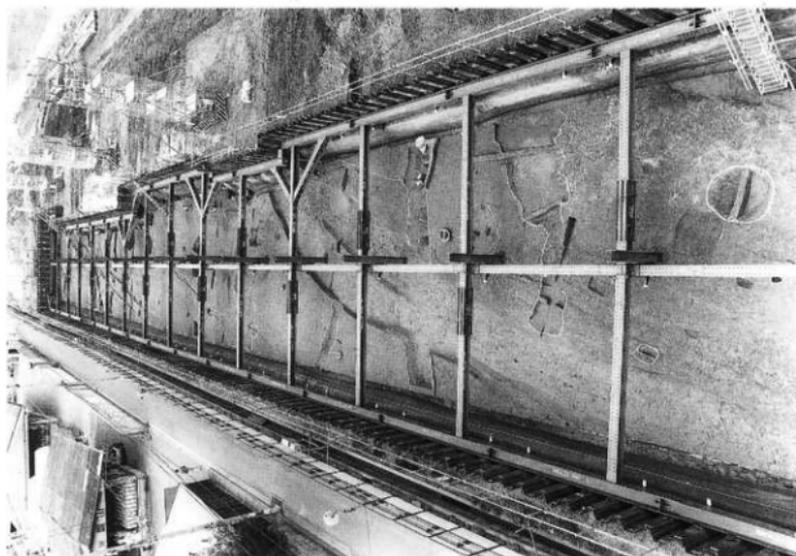
29-2 調査区 全景(西から)



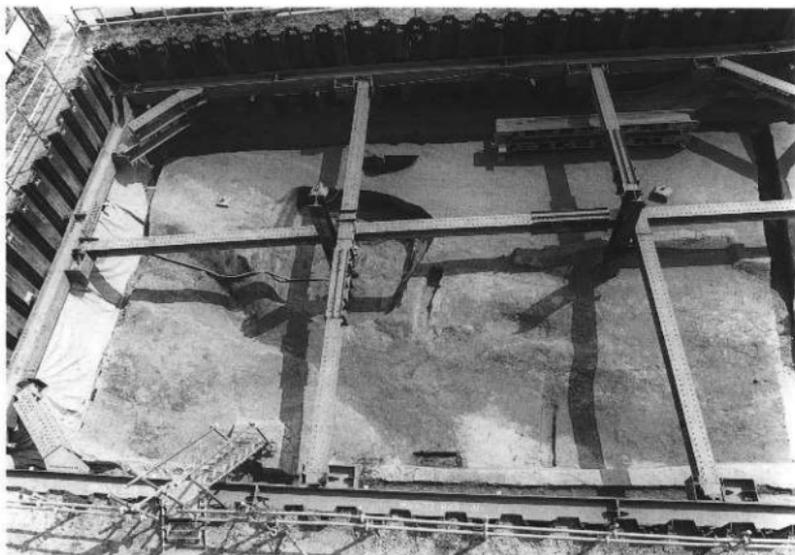
29-2 調査区 全景(東から)



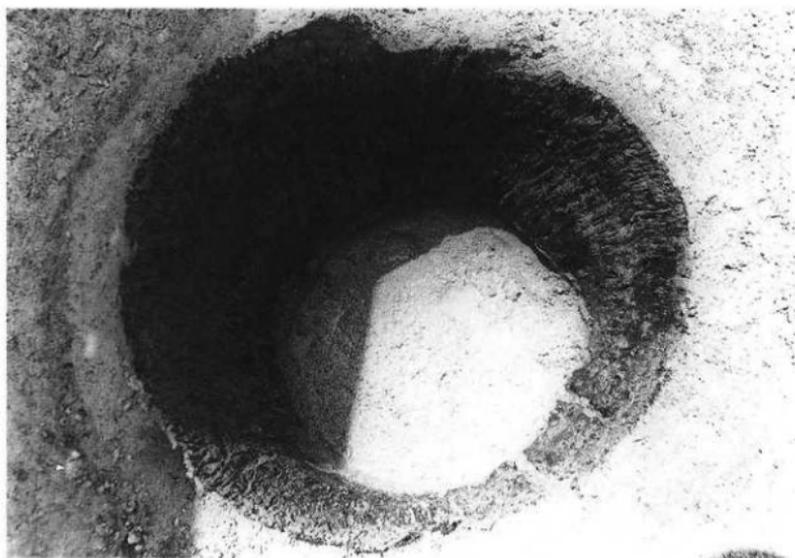
29-3 調査区 全景(西から)



29-3 調査区 全景(東から)



29-4 調査区 東部遺構検出状況(北から)



29-1 調査区 SE4002検出状況(南から)